

T 02
N 69
39

# 日本における統計学の発展

## 第 39 卷

話し手	森 田 優 三
聞き手	竹 内 清 郎
	松 田 芳 郎
陪席者	守 岡 隆



1981年8月21日(金), 12月8日(火)

日本統計協会にて

26027

10/12  
26027

## ま え が き

1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行\*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜\*(代表者)、野沢正徳、広田純\*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎\*、三瀨信邦\*、森博美\*、山元周行 (\* 推進係)

2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。

3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。

4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。

5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

竹内 実は、今年の8月に先生にお手紙を差し上げましたときの私のメモをもとにしまして、このように1から11まで質問をつくり、松田君の方にもコピーを送ったんですけれども、なるべく先生がいままでお書きにならなかった部分といいましようか、お書きになりましたその行間からだけでは十分につかめない細かなところを先生にお伺いして、何か記録として残したいと思ひまして。

森田 ただ、近ごろ非常に記憶が悪くなりまして、その本(「統計遍歴私記」)に書いてあることがすべてかもしれません。わりあい昔の戦争前のことは書いてきているんです。戦後のことは、どうもやっぱり記憶が薄れてきていまして、ご期待に沿えるかどうかわかりませんが。

竹内 去年も先生からお話を承りまして、やはり戦前の方が記憶としてはっきりしているといわれたもんですから、戦後のことについてはいろいろ記録等もわりあい完備していたり、そういう話も承っていますので、できたら戦前にポイントを置きまして、いろいろお聞きできたらと考えてきたんです。

森田 ただ戦前ですと、「統計遍歴私記」に書いてあること-----。

松田 「統計遍歴私記」の中に、先生の子供時代の話、パーソナルヒストリーというのは全然入ってないんですよ。

森田 そりゃそうですね。そんなこと入れていいんですよ。

松田 できましたら-----。ちょうど大学を退官される先

先の記念の座談会なんかのときは、子供といいますが、必要な場合には小学校なり中学校、あるいは先生が神戸高商にお入りになりまして統計学をお勉強されるようになった端緒といたしますか、モーメントがございまして、そういうことを-----。

森田 私の家は大阪の市の真ん中で、家業は建具屋なんですよ。大阪の商人というのは、いまは違うでしょうけれども、昔は本当に、子供に教育させるなんというのはムダぐらいの考えで、私の兄貴は4年制の尋常小学校を終えまして、高等小学校に2年行って、それから中学へ行ったんです。私はその次で、私が卒業するときには尋常小学校は6年制ができていまして、それで中学へ上がったんです。私の家はそういう職人に近いような商人でして、そのころの中学校というのはいまの大学以上なんです。ですからそういう家で子供に中等教育を受けさせるというのはちょっと格別なんです。

私の家は私の祖父の時代からキリシタンなんですよ。そういうふうな関係で、わりあいそういうことには先進的だったんです。私の姉なんか私より1回り上なんですけれども、女学校へ行きました。いまでもプール(清泉)女学校というずいぶん古いミッションスクールが大阪にあります。そこへ行っているんです。私も、少なくとも中学はおやじが無条件で上げてくれたんです。そういうことで、非常に私自身は幸せだったんです。

そのころ別にこれという思い出はありませんけれども、結局、あまり親に負担をかけないで、しかし、勉強したいというので、中学卒業して進学するときに一番手近な学校を選んだわけなんです。専門学校へ行ったのは私が

初めてなんです。私から後は、後といっても1人しかおりませんでしたけれども、私の経験からも専門学校へ行くことにはなっておったんですが、手近の学校でつぶしがきくという考え方で、神戸の高等商業を選んだわけなんです。

その時分は無試験の制度がありまして、東京高等商業は無試験の制度があって、神戸の高等商業というのは作文の試験をするんですね。名目上のあれだと思えますけれども、参考に作文を書かせてみて、それで、こいつはダメだというふうに、除外条件とする、そんな制度でした。私は成績が一とおりでいいもんですから、とにかく無試験で入れてもらったんですよ。ですけれども、そのころは別に何を専攻するという考えもありませんで、ただ漠然と勉強しておったんです。

いまと違いまして、東京高商と神戸高商とは4年制なんですよ。私が神戸に行って勉強している間に、東京高商の方は商科大学に昇格しまして、それで神戸の方から東京の商科大学に転校したわけです。あのころは予科1年、本科3年ですから、本科2年修了で試験を受けて東京へ入るんですよ。ですから、本科2年終了で東京へ来たんですけれども、そのときはまだ統計の勉強はしてありません。藤本先生が講師で集中講義に来ておられたんですが、それは3年生の科目でしたから私は受けていないんです。

東京商科大学といえば、大先生は福田徳三先生ですね。一橋へ入ったからには、一番偉い先生につこう、こういう非常に単純な気持ちで福田先生のプロゼミに入れてもらったわけなんですよ。あのころのプロゼミは、先生は

非常にやかましい人だったけれども、おそらく志望したのを全部採ってもらえたんじゃないかな。とにかく、福田先生はこわい先生だからといって、あまり勉強しないのは敬遠したんです。私はそんなこと知りませんから、とにかく入ったんですよ。それで、「資本論」を原書で読まされたんですけれども、とにかくちんぷんかんぷんですね。こいつはとてむ性に合わぬと思いました。

竹内 「統計遍歴私記」に載っています。

松田 上田貞次郎先生の話のところであらうとお書きになっていらっしゃいますね。

森田 「メタモルフォーゼ」というのが出てきますか。これが「資本論」に出てくるんですね。メタモルフォーゼというものが何のことだか全然わからない。それで、メタモルフォーゼでもう失格しちゃって、本科1年の10月ごろには大分いや気がしていました。何をやるかというあまりはっきりした気持ちもなかったんです。それもどこかに書きましたね。

本科1年の試験勉強で、図書館へ入っていろいろ科目の勉強に本を読んどったんです。統計の試験の前の2〜3日間、統計の本を引っ張り出してやっと思ったんですわ。その時分あまり日本語の本はないので、英語の教科書でやさしいやつばかり出して読んでおったんです。それで何かちょっとおもしろそうだという非常に簡単な動機で、平均の勉強を少ししてみようかと思って、試験が終わりましたら藤本先生のところへ行きました。正直いって、藤本先生の講義そんなにおもしろくはなかったんです。それは藤本先生もいろいろ教えてくたさったけれども、むしろ、図書館の勉強で何かやってみようという気

持ちになりました、先生のところへ行ってお願いをしてみました。先生採ってくださるといって、そんなことで統計の勉強をするようになったんです。

松田 ちょっともとへ戻りますと、神戸高商のときにはどんな先生がいらっしゃったんでございますか。

森田 神戸高商で一番印象に残る先生というのは坂西由蔵先生ですわね。これは福田先生の高弟で、とにかく強度の近眼で、もうほとんど失明に近い状態だったんですよ。大きな字で原稿を書いてくれて、こうして(目に近く引寄せて)やっておられましたね。

松田 そういえば、大塚金之助先生が牢屋に入っているとき、坂西先生がほとんど失明状態で、手紙をお書きになって、転向して出てこいというふうにいわれて、転向する気になったというようなことをおっしゃっておられました。

森田 その話は知らぬけれども、それは、転向じゃないんだらう。あのころの師弟関係というのは非常に温かでした。

余談になりますけれども、私が1つ感激しましたのは、学生の時分だったか、大塚先生は神戸高商の先輩ですから、大塚先生のところへ何かで行ったんです。そのころ、大塚先生はマーシャルの翻訳をしておられたんですよ。私どもも大塚先生というのは偉い先生だと思っておったが、その大塚先生が、マーシャルの翻訳をして、その翻訳を福田先生と坂西先生に見ていただかなければ、というようなお話をされたんで、私感激したことがある。こんな偉い先生が、その先生にもう一遍見てもらうという、

これはやっぱりえらい違うなと思った。

偉い先生といえば、坂西先生というのは別格で、しかし講義そのものは別にどうということはない。そのころ、私どもはまだ何も知りませんから、どんな講義がいいか悪いかということは見当がつかないんですよ。

神戸では海損論の大先生がいましたね。水島先生の次の神戸高商の校長。その先生は海損論の先生で、非常に講義が専門的なんですよ。この先生は、学校の先生をしておりながら海損清算人をやっておった。学校の研究室を事務所にしてそういう仕事をしているんですよ。そんなこと昔はできたんだな。そんな人で、その講義は非常に専門的で、私どもにはもったいないんだけど、しかしちんぷんかんぷんなんだ。ちっともおもしろくないんだな。それで学生が騒いじゃって、とうとうボイコットしたんですよ。そうしたら、その先生やめるといい出した。ところが大先生ですから、学校としては至宝で、水島校長先生が心配しまして、われわれが本科2年のときだったと思いますが、学生を講堂に集めまして、声涙ともに下って、「オレがやめてもいいなら君たちやれ。しかし、君たちがそれを反省してくれなければオレがやめる。どっちかを選べ」こういわれた。学生はすっかりシユンとなってしまって謝ったですよ。水島先生という人は何といっても偉い人でしたね。

そういう先生の印象を持って私東京へ来た。そうしたら私のときの学長は佐野善作先生。こういっちゃ悪いけれども問題にならなかつたね。水島先生というのは非常に偉い先生でした。

それから先生ではもう一人、保険の滝谷善一先生。こ

れは藤本先生の先輩でした。

しかし、みんな専門の方では非常にすぐれた人だったですよ。

竹内 滝谷先生のお名前は、「統計通歴私記」の日本統計学会の初期のころの名前にありますね。

森田 それは、会員に入っていたのだ。

そういうことで、私は、一橋を卒業ということになりますけれども、卒業するときに、いまではどうか知らぬけれども、就職の世話をしてくれる係の先生が2~3人できるんですね。そして、その先生のところへみんな相談に行くんだ。私はその前に藤本先生に、「私みたいな人間は商売人には向かぬから、どこでもいいけれども学校の先生になりたい」とお願いしてあったんですね。先生非常に心配してくださって、いろいろお骨を折ってくださいました。

先生の口ぶりからすると、先生は、学校へ残してやりたいという気持ちが少しはおありになった。ところが先生はまだ後輩の先生ですから、ほかに偉い先生がたくさんおられて多分遠慮されたんだと思いますね。あるいは、ぼくの成績がそれほどよくなかったのかも知れない。

私は大正14年に出て、横浜高商が大正13年に開校したんですけれども、新設の専門学校なんで、まだ教授陣がそろっておりません。横浜高商の校長さんというのは長崎高商の校長さんをしてやった田尻先生で、藤本先生はこの先生の少し後輩なんですけれども、同じ時分に外国で勉強しておられてお知り合いだったもんですから、「横浜でもよければ」と先生はおっしゃった。多分そういう考え方があったんだろうと思うんですけれども、紹介し

ていただいたんです。

ところが私どものときには、川村豊郎氏が非常に秀才で——左右田先生のゼミで、ずば抜けた秀才で、ほとんど無条件に決まっておったんですね。そのほかに、福田門下には杉本栄一、上田貞次郎門下には山中篤太郎、そうそうたるメンバーがそろっているんですよ。それがみんなダメなんだ。そういう情勢だったから、私なんかもちろんだめで、頭を突っ込むことはできなかつたんですけれども、みんな冷やメシを食わされたんですよ。杉本君もどういうかっこうで勉強を続けたのかな。山中君はどこかの通信社へしばらく行っていましたね。それでヨーロッパへ行ってたんです。それから魁頭君は、やっぱり神戸の同窓ですけれども、高垣先生のゼミだったかな。そういう連中は、みんな正規のスタッフじゃなしに、何かいろいろな形で学校にくらいついておりましたけれども、とにかく正式に残ったのは川村氏一人ですね。

そういうことで、私は横浜へ紹介してもらったんですが、本当いうと、杉本君も山中君もそれぞれ横浜へ首を出しておったんです。ところがどういう関係か、藤本先生が非常に熱心に私を推薦してくださったんだと思います。それでとにかく私ともう一人、福田ゼミの井上鎧三君、この二人が横浜へ行くことになったんです。

しかし、最初の面会に行ったとき、あまり芳ばしくないんですね。校長先生が、「せっかく来たんだけれども、ほかにいいところがあったらそっちへ行った方がいいんじゃないか」といったもんだから、(笑) こっちはもうダメだと思った。横浜の野毛山のあたりを歩いて、これはもう横浜の見納めだと思った。

そんなことで、先生に報告しましたら、「それじゃおまえ、もう一遍神戸へ行ってこい」といって、神戸へ行ったんです。そのときに、福田ゼミで、つい10年ばかり前死んだ、私の神戸の同窓の宮下孝吉が大体決まっております、私が2番手に行ったわけですから、水島先生だの滝谷先生にも会ったんですけれども、「ほかにいいところがあつたら」というような話で、そんな話のうちに横浜に決まりました、横浜へ行ったんです。

神戸の先生で、いろいろありますけれども、そんなことじゃないですか。

竹内 先生の「統計遍歴私記」には、その当時横浜高商で、統計学だけじゃなくて、金融論関係も担当なされたとか。

森田 そのころの統計学というのは端っこの学問で、あまり重要科目じゃなかったですし、時間も少ないですし。そのころは大体、大抵2科目は持たされておりましたね。それは東京や神戸の大学でもそうですよ。みんな、主なやつほかに、2次的なものをそれぞれ2科目は原則として持っておりました。ですから、藤本先生だって保険と統計でしょう、福田先生だって原論と政策でしょう。

松田 中山先生とか杉本先生も、原論のほかに統計学を持っておられた？

森田 そういうことです。それで、統計を中山先生と杉本先生が交代にやっとなんでしょう。どっちもいやなもんだから、それで「おまえ来い」といって、2人で相談して、戦争後ばくを引、張ったわけですよ。

竹内 ちょうど先生が局長をされているときに、最初に非常勤で一橋にお見えになられまして、そのとき私が聞

きました講義が統計各論という名前で、1週間に1遍……。森田 きっとそのときは、中山先生か杉本先生が統計の方をやっておられた……？

竹内 ええ、交代でやっておられました。そのほかに統計各論があり、森田先生が担当されておりました。

森田 そうでしたね。それで経済統計かなんかやったんですしょう。

竹内 いや、私記憶がありますけれども、推測統計の方です。

私、24年に先生の講義に出たんです。実は、この間家で大学時代のノートをちょっと調べたんですけれども、そのときに私の記憶にありますのは、24年の夏休みに、先生の「統計各論」との関係で、ケニーの「Mathematics of Statistics」を古本屋で見つけてまして、これを勉強しましたら、先生の講義が非常にわかりやすくなった記憶があります。ですから、いわゆる推測統計学の方を講義なさったと思います。

森田 「統計各論」でそんなことやった？そうですか。

竹内 試験は、あの当時筆記試験はなくて、レポート提出でした。

森田 ああ、そうですか。たくさん聴講者があつたんですしょう。

竹内 聴講者は大体10人台で、私は毎週出た方です。

森田 ああ、そうですか。そんな当時のことは忘れちゃった。

松田 ちょっと、私何度も話を引き戻して申しわけないんですけども、大正11年に東京商大にお入りになって、

たしか大正12年が関東大震災でございませぬ。そうすると、先生は、一橋にあった校舎で最初習われて、それからその後国立の方に引越して、後はずっと……。

森田 いいえ、国立へ行ったのは昭和4年です。ですから、それまでは一橋で、あそこに仮バラックをつくりまして、それでずっとやっておったんです。ですから、私は全部バラックで1年半やった。

そのころ、東京商科大学はどこへ行くかというんで大いに議論しまして、こんな雑踏のちまたでは勉強できぬから、もっと閑静なところへ行って、雄大な自然の中で勉強するという議論を吐くやつもあれば、私なんかはむしろ反対しまして、田舎へ行ったらやっぱりのんびりしてダメで、こういう雑踏のちまたで世間と密着して勉強しなきゃダメだ。そんな議論を、学生同士、「一橋を考える会」だとかでやっておりました。結局、あの場所は、箱根土地の経営しておった場所なんです。

松田 そうしますと、あのころ、先生は図書館でいろいろ本を読まれたとおっしゃっていましたが、あのころ図書館もバラックで、何とか差し支えなく……。

森田 図書館は焼け残ったんです。非常にそういうところは偉かっただすな。図書館は、大震災の火事の中でみんなが協力して守ったんです。図書館は焼けなかったから、書物も大部分は助かったんです。

ただ、研究所にありました村瀬文庫が焼けたんです。村瀬文庫は藤本先生が管理しておられたんで、村瀬先生は藤本先生の先生ですから、村瀬文庫には非常にいい本があっただすね。それが焼けちゃったんで、福田先生が怒られて、「藤本、おまえの責任だ！」って——先生も

露骨で、そういうところは非常にきついですから、藤本先生すっかり恐縮しちゃった。

あの後、私大阪に帰っていましたら、藤本先生から、「村瀬文庫が焼けたから至急補充しなきゃならぬ。何でもいいから、大阪の丸善へ行っいい本を片っぱしから買ってこい」と電話をもらいまして、それで大阪の丸善へ行っ、保険の本のことはわかりませんから、統計関係の本を片っぱしから引っこ抜いて、東京へ送ってもらったことがあるんですけども、そのときは非常に愉快だったね。好きな本全部買えるもん。(笑)楽しかったですよ。

松田 「ヘルメス」という雑誌は、後で一橋で成長された先生方が大抵お書きになっていて、先生は「ボルトキウィッチの小数の法則」というのをお書きになっていると略歴にございますけれども、ボルトキウィッチを読むようになられたきっかけは-----?

森田 それは、卒論でドイツの文献を中心にやっていまして、その中にボルトキウィッチの「小数の法則」というのがあるということが出てきまして、これはおもしろいと思った。そのとき、藤本先生の後輩の、やはり一橋で損害保険の講義をしておられた先生がいまして、その方がその当時ヨーロッパに留学しておられまして、そこへ藤本先生がしょっちゅう本を頼んでおられたんです。そういうあれがあったもんですから、私も、ボルトキウィッチの「小数の法則」を先生を通じて買っていただくようお願いしてあったんですが、それが届いたもんですから。

その前に、「ヘルメス」という雑誌は大正12年に第1号が出たんですよ。多分、大正12年だと思います。

松田 13年に3号でございましてから、それぐらいだと思います。

森田 私の中学の同窓で、京都へ行かれた社会学の高田先生のゼミだった水本孝明というのがいるんですが、それがその編集の仕事をしていまして、「森田、おまえ書け」といって、ぼくにチャンスを与えたんですよ。そのとき、ぼくは第1号には、相関分析の応用をした何かを書いたんですよ。それもどこか探せば少なくとも題名ぐらい出てくるかもしれませんが、ちょっといま忘れてましたけれども、それを第1号に書きまして、福田先生がそれを見られて、藤本先生に「おまえのところのこういう男、これはどういう男だ。こいつをかわいがってやれよ」といってほめてくださったことを、藤本先生から聞いたんですよ。私がプロゼミのときに福田先生のそこにおったことは、先生多分忘れてるんだと思うけれども。(笑)

福田先生のプロゼミのときに、ゼミに出て学生の世話をしてくださっておったのが井藤先生です。井藤先生がまだ助手で、丸坊主で。

いろんな話になりますけれども、大正11年ですから、なかなか本が簡単に手に入らないんですよ。「資本論」なんかおいそれとは買えないんですよ。それで井藤半弥先生がいろいろ手分けして、方々の先生が持っている学校中の「資本論」を全部集めてくださったんですよ。私は増地先生の持っておられた本を貸してもらって、増地先生の家へそれを拝借に行ったことを覚えていますわ。そういうふうにして全部本を動員して、それで「資本論」を

やっただんですよ。

松田 大阪の丸善でいろいろ本をお買いになったころは、大体こんな本が出ていたりしておもしろそうかどうかというところは、どういふものでお調べになっていたわけですか。

森田 それはいろんなものから、それからそれへと出てくるんです。

松田 あのころですと、「JRSS」のブックレビューなんていうのは……？

森田 まだそんな学術雑誌を読むところまでなかなか手が行きませんわ。

むしろ私は、ドイツの論理学派で卒論を書いたんですけれども、高田保馬先生の「大教法論」というのがありますね。あれともう一つは財部先生の「ケトレーの研究」、ああいうものを読みまして、その中に出てくるいろんな参考文献をたどっていった。高田先生の「大教法論」の中に出てくるような文献で教えてもらいまして、ドイツの論理学派は、カウフマン、フォルヒャー、この2冊が種本だったですね。

松田 竹内先生のメモの中に、ドイツ統計学派の影響といひますか、そこらのところはどつだつたんでしようかという質問があったと思うんですけども。

竹内 森田先生の「統計遍歴私記」を見させていただきますと、ヨーロッパ留学のときは、ドイツよりオーストリーの方が非常に印象が強かつたんでしよう？1937年でしょうが、先生がドイツに……。

森田 ドイツにおつたときですか？それはやっぱり、いろんな政治的な関係ですわね。

私がドイツへ行きましたのは1937年ですから、もうヒットラーが政権を取って、ヒットラーの最盛期だったんですね。ですから、ユダヤ系の大学の先生はみんなパージで追ん出されまして、大学にはあまりおもしろい先生はいなかったですよ。そのころのドイツの統計は、あまり元気なもんじゃなかったですね。

私がベルリンに着いたのは、1937年の春、5月ごろでしたわね。学期が始まっていたから、着いてすぐは大学へ行けませんでしたし、もっぱらドイツ語の勉強に通っていました、その冬学期、ドイツのベルリン大学と、もう1つ、ホーフシューレ（高等商業）の2つへ行っただけです。ベルリン大学の方はオットドンナという若い先生が講義に来ていまして、軍服着て来るんですよ。あのころですから、どういう関係だったかわかりませんが、とにかく軍籍に身を置いて講義に来ておられたんですね。高等商業の方はミヤワルトという人がおりまして、これ「統計遍歴私記」にも書いてありますけれども、あまりおもしろい講義じゃなかったですね。それからワーゲマン。ワーゲマンは大学では講義していませんで、ワーゲマンの例の景気研究所というのがあったでしょう、そこで仕事をしておられたんですが、有名な先生ですし、一遍訪ねていろいろ教えてもらおうと思って行っただけですけども、ちょっとキザな男で、あまり印象はよくなかった。ユダヤ人でして、書いたものと大分印象が違いました失望して帰ってきたんですよ。

1938年になりました、あと半分ウィーンで勉強しようと思ってその準備をしておられたんですが、ちょうどそのときにヒットラーがオーストリーへ侵攻しまして、合併

してしまっただけなんですよ。それで、ウィーン大学でも大騒動で、ユダヤ系の先生はみんな首になりまして、学校はてんやわんやで、ほとんど半分休校みたいな状態でしたね。統計関係の講義もあまりありませんでしたし、めばしい先生もありませんでした。例のウインクラー先生が本来は講義するはずだったので、私はウインクラー先生目当てにウィーンへ行ったんですが、先生の奥さんがユダヤ人なんですよ。そういう関係で、やっぱりパージで、大学の講義できなくて大学を首になりまして、何かオーストリーの統計局の局長をしておったクレーゲルという人が講義しておりましたけれども、あまり有名な人でもありませんし、大学の方は断念しました。

少数民族研究所というウィーン大学の外郭機関の研究所がありまして、その仕事はウインクラー先生が続けてやっておられて、所長をしておられました。図書室がありまして、統計の本がそろっておったんですわ。そこへウインクラー先生を訪ねて行って、先生に直接指導してもらったわけじゃないけれども、その図書室を使うことを許してもらいまして、それですと毎日通っておったです。

事務室に女の事務員が3人ばかりおりましたが、みんな非常に親切に世話してくれてたんですけれども、そのうちの1人がやっぱりユダヤ人だったんですわね。ヒットラーが来ましてから、ユダヤ人追放でそのお嬢さんもやめることになりまして、かわいそうだったですわ。

竹内 先生のお話ですと、その当時統計学のしかるべき先生方がおられなかったわけですが、そのときに、人口増加の分析の学位論文の大体の研究を完了されたという

ことでしたが。

森田 結局、いまの少数民族研究所で統計文献をいろいろ引、張り出して読んでいまして、民族関係ですからどうしてもそういうふうな人口文献が多いんですよ。それで、そちらの方にだんだん集中していったわけです。何となしにああいうか、こうのものができました。

むしろ、ウィーン大学は景気研究の1つのメッカだったですね。ドイツでナチスに追われた人がみんなウィーンへ行って、ウィーン大学の研究所でいい研究をしておったんですよ。いま名前ちょっと出てきませんが、いろいろ……。

竹内 モルゲンシュテルン教授も……。

森田 モルゲンシュテルンだの、いろいろな人がそこに集まっておったんですよ。それが、やっぱりヒットラーのウィーン侵攻でてんやわんやで、みんなアメリカへ逃げていった。そういうことで、そちらの方も壊滅的な打撃を受けました。ちょうどそのときに、京大の柴田敬先生が夫婦で留学していまして、私がウィーンへ行ったすぐ後、柴田君が来たんですよ。それで、一緒にウィーンの景気問題研究所へ行きまして、所員の人と面会しようと思ったんですけども、そのときは何かてんやわんやでして、みんなウィーンを逃げ出す算段をしているんですよ。モルゲンシュテルンなんか、その少し前にアメリカへ逃げて行ってしまったんですよ。柴田君と一緒に「ウィーンもダメだな」と言ってたんです。

松田 あの当時、先生がいらっしやったころには、アブラハム・ワルトなんかもアメリカへ行ってたんでしょうか。

森田　そうです。私が行ったときにはまだおったんですけども、ワルト氏も近いうちにアメリカへ行くんだということも、景気研究所の人から聞きました。

あのころ、赤い表紙で薄っぺらのパンフレットが、ウィーンのエコノミクス研究所からシリーズで出ていたでしょう、いろんなのが。みんないい研究でしたね。それがあったもんですから、ぼくはむしろそっちの方を勉強したかった。ところがそれがもうできなくなりまして、ウインクラ先生の研究所へ行ったら人口統計の文献が中心だったもんだから、それをやったわけなんです。

松田　そういわれてみますと、先生が「物価指数の理論と実際」という厚い本をお書きになったのは、たしかドイツへ行かれる前ですね。

森田　それはもう前ですよ。

松田　その前に、「統計概論」の前身のB6判の小さな本を、森山でお出しになりましたですね。あれが手塚寿郎先生の文庫の中に入っていたのを私見まして、それで、「はア、森田先生の昔の本はこういう形だったのか」と、非常になつかしく読んだ記憶があるんです。

森田　あれは昭和7年でしょう。あれの原稿料で、ぼくは結婚したんだ。(笑)

竹内　私の記憶に間違いなければ、先生の局長時代の官舎、こちらにございましたね。あのときお伺いしたときに、たしか印税でピアノを買われたとかいわれました。

森田　ピアノになった印税は「物価指数」。「統計概論」で結婚して、「物価指数」でピアノを買ったんです。(笑)

松田　あのころは、統計学に関するきちんとした書物が

あまりない時代だったという記憶があります。

森田 ないこともないんですけれども、非常に少なかった。みんな買って買える程度の数だった。

竹内 「統計概論」の初版を先生がお書きになったころのいろいろ苦心談といたしましょうか、それについて何かお聞かせいただけますでしょうか。

森田 あの本は、講義の原稿がああいう形にだんだんまとまっていったわけなんですよ。講義の草案を、最初はがり版屋さんへ頼みまして、がり版で本の形につくってもらって、それを学生さんに実費で買ってもらって、講義しておったんです。それがだんだんああいう形にまとまっていったんです。私が統計の講義を始めたのが昭和2年ですから、あれは多分昭和7年ですわね。2年ばかり、そういうがり版刷りの講義本をつくらせて、学生さんに買ってもらって、それがああいう形にだんだんまとまっていったわけなんですよ。

いまもありますけれども、神田に森山書店というのがありまして、森山書店というのは、横浜高等商業の先生方が書く雑誌、「商学」という名前をつけていましたけれども、それを世話してくれておった本屋さんなんです。私がその「商学」の編集を手伝わされておったから、しょっちゅう関係がありまして、それで私の本を出してくれました。そういう関係で、統計学会が始まって会報を出すときに、私がそういういろんな小使い役をしておったもんだから、その会報を森山にやってもらったんです。それからずっとその関係ですわね。

竹内 たしか昭和7年ですと、いま松田君もいわれたように、まとまった単行本というか、適当な単行本が日本

でなかったんじゃないですか。

森田 日本語の本はね。「統計通歴私記」にも書いておきましたけれども、とにかく日本の統計学というのは、大正10年前後がノツのエポックを画した時期ですわね。

そのころに、東大に有沢、一橋に柴田、郡、京都に蜷川、岡崎、関西学院の田村、同志社の宗藤、ああいう先生が一斉に出てきたんですね。不思議ですけれども、そういう意味で日本の統計学の新しいノツの時代だったんですね。もちろん統計学そのものは、いまのノツ前の記述統計ですけれどもね。そして、数学の勉強をしておった方も、そのころ少しづつ統計数学の専門家が出てきておったわけですね。そういうことで、大正10年というのがノツの時期だったんじゃないでしょうか。

松田 新しい統計の文献がいろいろ出始めたころは、蜷川さんと郡さんの間で統計の本質論争が盛んで——ただ、こういう言い方をすると、本質論争のお好きな先生にはしかられるかもしれませんがけれども、私どもから見ますと、本質論争というのは、あまり意味があったようには思えないのです。先生のお書きになっておりますものをずっと拝見していますと、かなり早いころからキートの実証研究とか、そういうことを並行させていて、本質論争にはあまり深入りなさらなかったという印象があるのですけれども。

森田 私にはむずかしくて、わからないんだ。(笑)

これは、詳しい正確なことは忘れてはいたけれども、私は私なりに、蜷川先生なんかには食ってかかったんですが、おまえのような考え方では実を結ばないと、先生い

うんだ。しかし、私にいわせれば、蜷川先生なんかの考え方は実を結ばないと思うんだ。(笑) それは「実」というものの内容が違うんでしようけれども、考え方によれば、私には論理というものがなくて、実践だけしかなかったんだらうね。

それから、蜷川先生と郡先生の論争も、どこか、かみ合わないところがあったですね。論争というやつは、皆かみ合わないな。(笑)

松田 蜷川先生は京都でいらっしゃるし、有沢先生は東大で、東西ともに本質論争がお好きという印象が、私どもあって、本質論争と関係のないところで実証と結びつくようになった統計学というのは、私どもから見ますと、先生の前後から始まるんじゃないかという印象を持っているんですけれども。

森田 それは学問の格が違うんだから、そんな大それたことはないと思いますけれども、有沢先生の本質論も、これまた非常にむずかしいので、本質論であるような、ないような、私からいわせれば、漠然としたものですね。こういっちゃ、有沢先生まだ生きておられるから、しかられるかもしれないけれども、有沢先生も、本当は統計の勉強をしたくて始めたんじゃないし、それをやらされたんだよね。先生はやっぱり、何と云って経済学、特に社会主義経済学をやりたかったんでしようし、先生の書かれたものは皆、そうですからね。ですから、有沢先生は統計の本流の方へは、あまり深く入っておられませんでしたね。

松田 ただ、私ども、そこらのところで伺っておきたいと思っておりますのは、高野岩三郎先生はわりと実証的

な、統計でも実地に自分で家計調査をデザインされるとかいうことをおやりになっていて、福田徳三先生も、たしか関東大震災のときは、かなり調査の側に立っているいろいろな仕事をなさっておられた。そういうふうなのとは違って、いわゆる作表された統計の解析に統計分析の焦点を当てようと先生がお考えになったのは、一体どういうふうな動機だったのか、ちょっとお伺いしておきたいと思っただけです。

森田 むずかしいですけれども、高野先生と福田先生は、大変仲がよかったんです。肝胆相照らしておられた。いまいった高野先生も、月島の労働者の家計調査をおやりになったし、福田先生も震災の後、実地調査、非常に興味を持っておやりになって、調査という具体的な実体に入っているという気持ちは、やっぱり、学問研究のイデオロギー的な側面と、かなり密着した研究の仕方じゃないかと思えますね。

私にはそれが無いの。むしろ、そういうことなしに、ただ数の上に出てきたその現象をときほぐして、それから何かをつかむことに興味を持つ、こういう、非常にある意味で形式的な、実質のない、あるいは空疎なということになるかもしれないけれども、そういうことにいまでも興味があるんですよ。ですから、非常に形式的な学問の仕方というか、物の考え方というか、そういう意味では、学問というものの考え方が非常に浅はかであると思えますけれどもね。

松田 浅はかかどうかは別にしまして、そういうふうにお考えになっていたのは、藤本先生の影響が強かったと考えるといいのですか。それとも、藤本先生ともまた独自

であった……？

森田 こういっっちゃ悪いですけども、私は統計学に関して、そう藤本先生の学問的な影響は受けていないと思いますね。

松田 そういわれると、はっきりわかりました。藤本先生は一橋の中では、統計学の先生の開祖みたいになっている。記念論文集とか、その他、私、ちょっと好奇心に駆られて読んでみたんですけども、保険の先生であって、統計学の先生だという印象をあまり受けなくて、そのところも1つ不思議で、知りたかったことなんです。

森田 こういっっちゃ、なんですけれども、先生はやっぱり保険が中心で、さっきもいったように、2つ講義しなければならぬ。それで保険というのは、少なくとも生命保険の方でいえば、それは生命統計にのっからなければできませんからね。しかし、海上保険だって損害保険だって、損害というものについての統計的なもの、ファクトにのっからなければ経営していきませんから、基礎には統計があるわけなんですけれども、しかし、そのころの保険学、特に海上保険学というのは、これはむしろ法律、約款論です。藤本先生の保険論も約款論ですから、ちょっとこれはかみ合わないですよ。先生は本来保険学者ですから、統計というのは、そういう制度上、ある意味で仕方なしにやっておられたということで、私どもはそこにくっついていったわけなんです。

そういう意味では、先生の影響は、人格的な影響は大いにいただいていますけれども、しかし学問上の影響は、そう私自身もないと思っております。

松田 というふうに考えていきますと、先生が最初の「統

計概論」をまとめられて、その次に、大著の「物価指数の理論と実際」をおつくりになっているときに、一番影響を受けたと考えられる外国、ヨーロッパの学者といますと、どういう方の影響を受けられたということになりましたでしょうか。

森田 卒論に「ドイツ論理学派」書きましたけれども、そういうものの影響は、ほとんど残っていませんわね。

松田 そのところを、私は一度伺ってみたいと思っていたんです。ドイツ風の本質論といますか、ああいうのに近いような統計学と関係がなくなられたところが、一体どういう-----。

森田 なくなったというかね-----。

松田 どういう形でそういうふうになっていったか。

森田 それは、私自身の素質、能力、そういうものを突っ込んでいくだけの力がなかったということが本当かもしれませんね。しかし、私の学問は、学問というとおこがましいですけれども、ある意味では非常に実際的なんですよ。そうかといって、また逆に非常に皮相な、表面的なものもあるんですけれども、どちらかというところと形式的というか、どういっていいか、自分ですとよくわかりませんがね。

竹内 先生の「統計概論」の初版が、そのころ版を重ねられましたね。そのときに、統計解析、あるいは分析的な観点からしますと、ドイツの統計学よりは、ユールとかボウレーとか、ああいうのに近いような感じを受けるのです。

森田 そうです。結局、イギリスの記述統計、あの先生方の影響が非常に強かったですね。ボウレー、ユールで

すね。実際、講義始め出してから、もっぱらイギリス統計学で勉強して、それを祖述したというようなかっこうになっていきますね。

ドイツに行きましたときに、最初に書いた「統計概論」を4~5冊持って行って、さっきのドンナーにやったんですよ。ベルリン大学の先生に会って話を聞いたときに、持って行って、おみやげにあげたんです。そうしたら、「おまえは日本のユールだな」といわれましたけれども、(笑)結局、そんなかっこうになっていますね。

竹内 先生は、ドイツ、オーストリーにいらしたときに、イギリスには行かれなかったわけでしょうか。

森田 別に、イギリスへ行って勉強するという気持ちはありませんでしたから、ただ、旅行で寄っただけですけども、行きがけ、いまと違いました船で行くのですから、普通ならば、マルセイユに上がって、それからドイツへ汽車で行くんですけども、私は、とにかく一遍イギリスへ行ってこようというので、マルセイユからずっと船でロンドンまで、2週間近くかかるんですよ。ぐるっと回っていくのは10日ぐらいかかるんですよ。しかし、マルセイユまで行きますと、大体みんな上がりますから、後、船は非常に閑散になりまして、私は2等で行って、たぶん、マルセイユから1等船室に入れてもらったと思うな。(笑)非常に後は優遇してくれるんです。のんびり行きました。ですから、イギリスは戦争前は、戦後だって、別にそう長く行ったわけじゃありませんけれども、あまりよく知らないです。

竹内 先生がいらした当時は、カール・ピアソンは亡く

なっていました、あの当時、イギリスの統計学界のリーダー格の人はどうなんでしょうか。

森田 ピアソンが亡くなって、E・S・ピアソンはおりましたけれども、まだ若かったですね。ボウレー先生はおられたな。ユールもおりましたね。

私がボウレー先生に会ったのは、プラハで国際統計会議がありましたね。あのときだったかな。たぶん、あのときだと思います。

竹内 先生のご本を読みますと、昔は、在外研究員で行かれる先生方の数も少なかったでしょうし、行かれる場所もあまり広範ではなくて、よく現地で知り合いの先生にお会いになる、ご夫妻にお会いになるということが出てきておりますけれども、昔は、そういう点では、ヨーロッパへ行く場合には2カ月もかかる。あれは40日ですか。

森田 40日ですね。

竹内 特にそういう点で、ヨーロッパで、知り合いの方に顔を合わせられますと、また親密の度が深くなるわけですね。

森田 しかし、私は、いまの人の方が自主的に勉強しておられると思うけれどもね。あのころは、みんな遊んでいましたよ。(笑)

松田 杉本栄一先生の退官のときか、亡くなられたときの年報を見ておりましたら、非常に詳細なメモで、よく遊んでいるというとおかしいけれども、音楽会に行かれたり観劇されたり、いろいろしていらして、私の習いました先生で、室谷賢治郎という経営学の先生がおりますが、あの先生も、後で蔵書整理するのをお手伝いしたら、

きちんとスクラップブックに音楽会のプログラムとか何とか、ずっと張っていらして、早川三代治先生もそうで、皆さん非常に優雅な外国生活を送られたんだなと思って見ていました。

森田 それは私だって、私でもですよ。(笑) ベルリンにおった間、それからウィーンにおった間、一番丹念に行っていたのはオペラですね。少なくとも1週間に1回はオペラに行っていますね。そして、オペラの切符を買うことが大きな仕事だった。

竹内 先生のご本を読んでおりますと、たとえば、ウィーンでいろいろなオペラなり音楽会の券を買われるときに、ケルントナー街のプレイガイドで買ったということが書いてございますね。

森田 そんなこと書いてありましたか。

竹内 私もウィーンに行きましたが、いまでも、オペラ劇場のすぐ手前の角のところにプレイガイドがありますね。

森田 1カ所だけじゃなしに、何か所があるんですよ。

経済の問題もあるわな。(笑)

竹内 昔の方が優雅な感じします。

森田 私は、そのころのお金で、とにかくドイツマルクが日本の50銭ぐらいで、1回ごとに800円送ってくるのかな、3カ月分です。とにかく、私がもらっておった月給が、あのころ、150円か200円ぐらいだと思いますけれども、200円はもらってなかったと思うな。

竹内 私の記憶にありますのは、先生からお聞きした中で、大正14年に横浜高商に赴任されて、そのときの初任給が100円。その当時、日銀に入った場合、東大とか一

橋の官学ですと、75円だとか……。

森田 日銀じゃなしに、学校に助手で残りますと、75円くれるんです。

竹内 ですから、高商の教授の方が月給が高い。

森田 とにかく地方へ行けば、たくさんくれるんですよ。

竹内 いまとは逆ですね。

森田 いまと逆ですね。地方へ行けば、たくさんもらえる。地方はたくさん出さぬと行かぬということですね。ですから、私、100円もらいまして、もちろん独身ですから、下宿してしまして、極端に言えば、半分本が買えました。大体そのころ、外国の本、丸善で買って、1冊平均5円から10円でした。ですから、丸善にすれば、いいお得意さんだったと思います。いま、なかなかそれだけ買えませんな。

竹内 先生がベルリンにいらしたころに、1カ月の生活費と申しましょうか、本代等も含めまして、大体どのくらい……？

森田 いまちょっと、800円というのが、1月分だったか3月分だったか、書類で調べてみればわかるんですけども。

竹内 たしか戦前の方が、いまよりは余裕があった。

森田 いまより余裕があった。

松田 それはずいぶん余裕があったというふうに聞いています。

森田 それは外国に行けば、優雅な生活したんですよ。ですから、悪い先生は、ずいぶん悪いことしてました。(笑)

松田 手塚寿郎先生が2年の許可で行って、屋根裏部屋

で食いつないで、たしか5、6年いらした。

森田 あれは食い延ばしできたですよ。それから、やっぱり少しは持っていったかもしれませんけれどもね。文部省からくれるやつで、少なくとも倍くらいには食い延ばしできたですね。

しかし、私のときは、家内がずっと寝ていまして、そのの医者のお払いなんか送らなければならなかったから、向こうから逆に日本に送っておったんですよ。ですから、そうぜいたくできなかつたんですよけれども、でも、本買う余裕はあつたんですよ。

竹内 戦前の場合は、在外研究員で留学される場合、奥さんと一緒というケースが多かったのですか。

森田 奥さん連れていった人は、そうありませんね。ただ、高橋正雄君、あのフェミニストやから、亡くなった奥さんですけども、ずっと奥さん連れて旅行していました。それから、さっきの京都大学の柴田敬も、奥さん連れていってました。

それは行けたんですよ。連れていくだけの余裕はあつたわけですね。余裕というか、1つは、向こうで部屋借りて、自炊というか、奥さんにやってもらった方が安上がりですからね。そういうことで、1人暮らしと2人暮らしとは、費用そう違います。ただ、動くとき倍かかる。それだけの問題で、じっとしているんなら、費用はそう変わらないのですよ。ですから、そういうあれはありました。しかしまた、不自由な面もあるからね。(笑)

竹内 ウィーンで、ウインクラー先生の研究所は、ウィーン大学から若干離れているのでしょうか。

森田 ええ、大学の構内じゃなしに、真ん中に宮殿があ

るでしょう。あの構内にあるんです。宮殿の広場がありましたね。あの北側だったかな、そこにあるんですよ。ですから、学校とは全く場所は離れているんですね。

竹内 先生は、ウィーン大学の図書館にも通われたんですか。

森田 いや、ウィーン大学の図書館は知りません。

松田 ちょっと話は戻りますけれども、先生より少し上のオマで、数理経済学始められた方は皆、数学で非常に苦勞された。高等商業も数学はないし、商科大学に入っても、数学はあるようで、ない。非常に苦勞されたということをよくお書きになっていますけれども、先生の時代はどうだったんでございますか。

森田 私は、数学はきれいじゃなかったですけれども、そのわりには全然進歩していませんけれどもね。しかし、数学といっても、そのころの数学はいまの数学とは違って、微分、積分といっても、非常にむずかしい高度のものになっていましたし、それは数学の専門の先生から見ると、別の話かもしれませんが、大体しかし、経済学で、あるいは統計学で使っている数学そのものが、そのころはそんなにむずかしい数学じゃなかったでしょうね。それは、最近20~30年の問題ですものね。ですから、そう苦勞するということになしに、大体、私程度のもので、そのころの文献は、そうむずかしくなく読みこなせたわけなんですよ。

しかし、それは最近20~30年。特に最近は非常な変化ですから、とってあれできませんけれども。

松田 そう考えてみますと、中山先生はどこの高商だっ

たかな。手塚先生は、小樽高商に入る前は商業学校だし、皆さん、中学じゃないということが、数学入るのに非常に苦勞されたということなんですか。

森田 そうかもしれませんが、中山先生が一遍、久武(雅夫)先生に非常に感心しておられて、「久武君の数学は、さっぱりわからぬわ」といって、久武先生にはシャッポを脱いでおられたですね。

松田 何で中山先生前後の先生が、ああ数学に苦勞されたとおっしゃっていたのかと、ときどき思うことがあります。

森田 福田先生は、数学あまりよくおできにならなかつたんですよ。それで、数学のできるやつを非常に偉いと思っておられたんです。(笑)中山先生は数学おできになるから、中山先生に数理経済学やれといっ、割り当てられたんだと思いますが、中山先生が久武先生にシャッポを脱いでおられた。久武先生だって、いまはもう大したことないわな。だから、だんだんシャッポ脱いでいくんですよ。それはしょうがないわな。

松田 少なくとも、文科系の人たちの中でも数学がそれほど苦にならなくなったのは、大体先生方の時代からと考えていいんですか。

森田 いや、私どもの時代より、もうちょっと後の時代じゃないですかね。やっぱり戦後じゃないでしょうか。

松田 お話を伺っていて、あるいは商業学校からずっといらした方と、中学校からいらした方との授業科目の編成の違いなのかなということ、ちょっと感じたんですけれども。

森田 中学校出身は経済学の勉強するのは、数学あまり

好きじゃない連中です。数学のできるやつはそうでなしに、自然科学の方に行けるのですから、高等学校はそっちの方に行きますね。数学さらいなやつが、文科、それから経済に大体行くんです。ですから、中学出て経済の方に進んで、それで数学的な勉強するというのは、むしろ例外だったわけなんですよ。

ところが、いわゆる昔の商業学校出て、専門課程に進むのは、非常に進みにくかった。入学試験にみんな数学ありますから、商業学校で数学やってないですからね。ところが、神戸高商には第2部という制度がありまして、そこは数学の入学試験受けなくても、簿記で行けたんです。だから、商業学校出の秀才は、一応神戸に行って、神戸から東京へ行くんですよ。東京の方は、そういうしんしゃくしてくれない。全部、商業出でも数学で受けさせたんです。だもんだから、商業出はみんな東京を敬遠して神戸に行って、神戸通って東京に行ったんですよ。ですから、一橋で偉くなられた先生、大体そういう経路の人、非常に多いですね。

ところが、戦後はそれが、だんだん情勢が変わってきましたね。

松田　いまの話と、ちょっと関係があるんですけども、関数論的な物価指数のアプローチが、日本でこう実を結んだのは、やはり先生あたりからじゃないか。先生のお書きになった薄い本がございますね。ぼくはあの薄い本、非常に好きで、一番最初に読んだときに、非常におもしろいと思ったんですけども、ああいうふうに関数論的な物価指数というのが日本の物価指数の考え方の中

に入ってきたのは、大体、先生のあのご本のあたりからと考えるといいのですか。

森田 あっちの方紹介したのは、私がたぶん最初だと思いますけれどもね。

松田 あの後は、たしか山田勇先生の「東亜農業生産指数」、先生のあのご本が出た後で、少し時代が下がって、山田先生のあの本が出て、あのあたりが、日本の戦前における物価指数の研究のピークと考えると、大体間違いないんだろうなと思いながら読んでいた記憶があるんです。

森田 戦争が始まりました、統制物価になりました、それでとにかく表向きは、ヤミ取引なんということはあっちゃならないんで、それは表面に出せなかったんですよ。物価指数なんか全部、公定価格で計算しよったんです。ですから、それは本当にノミナルな指数で、何も意味なかったのです。

私、そのころ、日本銀行へ出入りしておりました、日本銀行のバッジをもらって、あそこの玄関、素通りできたんですよ。それで、日本銀行で表面には出せないけれども、一体、現在の物価水準はどれぐらいになっているかということ調べてみようじゃないかということで、いろいろ苦勞してやった覚えがあるんですよ。

もう一つ、物価統制協力会議というのがありまして、政府のやっている物価統制に協力するという趣旨の団体だったんですが、その物価統制協力会議の理事長というか、そういうのをやっておったのが、戦後の憲法をつくったときの国務大臣、金森徳次郎さん。この人が、ある意味で軍部からにらまれておったんだね。それでそのころ、物価統制協力会議の理事長をしておられて、そこに

私、手伝いに行っておりました、実勢物価を調べようというので、東京の家計調査をやりました。奥さん方に、買ったものの量と種類、何を幾ら買った、それを幾らで買ったということを一々書いてもらったやつを集めて、それを整理して、実勢物価を計算してみたことがあるのです。そんな仕事を手伝っておりました。

もう一つ日本銀行で実勢物価を調べたのは、それはそういうことじゃなしに、フィッシャーの交換方程式を使いまして、日本銀行の銀行券が幾ら出て、それに対して取引がどういうふうに変化しているか、そういう実勢を統計からつかみ出して、あの方程式でPの方の計算を試してみたら、そういうことがあったんですよ。

そういうふうなことで実勢物価指数みたいなものをつくって、そして戦争に負けて、アメリカさんがやってきたときに、戦争中のそういうふうな記録、全部出せというので、それを出したことがあります。

松田 その話、私、前に、先生に少し伺ったことがございまして、そのときにお伺いしようと思ってお伺いしなかったことで、そのころ、そういうふうな日本の経済の実相がどうなのかというようなことをしゃべるのは、かなり危険な時代だったというふうに伺っているわけですが、けれども、それは一体、経済学者相互の間ではどうだったんだろうか。

森田 経済学者相互の間といいましても、たとえば、学会開いても、そういう問題はタブーですから、大っぴらには議論できませんし、やっぱりフォーマルなことばかりに問題を持っていくしか、実相というところにはなかなか入っていきませんでしたね。

松田 お友達相互の間では、かなりおしゃべりをなさったということですか。

森田 それは理論的に、学究的に、そういう問題に入っ  
て調べていくということは、おそらく個人的、個別的に  
は、あまりやってなかったんじゃないかな。私が関係し  
たことで申しますと、これはやっぱりどこかに書いてお  
いたんですけども、例の陸軍に秋丸機関というのがあ  
りまして、そこで日本の経済戦力の調査をやった。これ  
は、まだ日米戦争が始まる前でしたわ。

竹内 ご本ですと、15年ごろと書いてありました。

森田 そうです。15年ごろですね。これは、そのころ有  
沢先生が、例のページで東大を首切られて、逼塞してお  
られたときですが、それでも軍部では、そういうことに  
関係なしに有沢先生を引っ張り出しまして、有沢、中山、  
そういう連中で、日本の経済戦力の調査をやったんです  
よ。私も中山先生の下で、人口についての分析をお手伝  
いしたのですが、たぶん、中山先生が労働、有沢  
先生が全部総括するという立場だったですね。

そういうふうなことも、そこでは結局、日本は戦争を  
やって、初めのうちはある程度戦争できるけれども、そ  
のうちに戦争できなくなる、経済的にまいつちまうとい  
う消極的な結論で、結局、あまり軍の喜ばないような内  
容だったものですから、それで秋丸機関はつぶれてしま  
ったという話を聞くんですけども、それが1つと、そ  
れからいろいろありましたね。

竹内 いまの点で、秋丸機関でのいろいろな調査、研究  
の結果なんですけれども、これはおそらく、ああいう時  
代ですから、公表はされなかったと思いますが。

森田 ええ、公表されません。

竹内 何らかの形で、非公式に一部でも残っていないのでしょうか。

森田 とにかくそれは全部出せということで、分析に使った資料なんかは、私の手元に少し残っておりましてけれども、最終的なものは全部持っていかれましたわ。ですから、どこにも残っていないと思います。

竹内 これは実は、東大の中村隆英君に、去年の秋口ですけれども、森田先生にいろいろなお話を承るという話をしましたら、ぜひそのころの話を詳しく聞いてもらいたいといわれたんです。

森田 それは有沢先生ももちろん持っておられないと思うし、中山先生の手元にもないと思います。それからいろいろなところで、戦争の末期になってからですけれども、死んだ大平さんのかわりにサミットに行った大来氏が外務省にいまして、大来氏が大体中心になって、「戦後の日本経済問題」というふうなテーマで、若干人を集めて仕事をやりかけたことがあったんです。それはもう戦争の末期でしたから、途中でつぶれてしまいましたけれども、土方先生なんかも顔を出されてね。

松田 土方先生は、マクロ的に日本経済のデータを押さえることに貢献なさって、戦後の歴史の中では、何となく東大紛争の中での悪者というイメージが強いと思うのですけれども、私どもから見ると、マクロの経済学の開拓者として非常に重要な方だと思っているんです。

森田 それは一時土方先生の勢力は非常に影響的でしたね。土方先生の下にたくさんの方が集まって、そういう日本の経済分析の個人的な仕事じゃなしに、チームを組

んでやる仕事を初めてしたのは土方先生でしょうね。忘れましたけれども、大きなレポートがありますね。

松田 あの仕事は、先生、同時代ごらんになっていて、どんな感じを持たれましたか。

森田 それは相当えらいことをやるなという感じでね。

松田 ああいうふうなチームワークでする仕事については、どういうふうに評価されていたのかということですよ。

森田 あのころとしては新しい仕事の仕方ですからね。そういうことにわれわれ慣れていませんから、初めてそういうやり方を教わったわけですね。ですから、私どもは、土方先生は自分が主体的におやりになったんだけど、戦争が始まりましてから、いろいろな機会に、たとえば、いまの秋丸機関というふうなものがあって、それが若干の人を集めてそういう作業をさせた。それから、さっきの物価統制協力会議で、やはり若干の人を集めて仕事をさせたというふうなことに参加した経験はありますけれども、土方先生みたいなああいったやり方は、戦争前には経験していませんね。

松田 何でそんなことが気になるかと申しますと、東京大学の経済学部出身の方と、一橋大学で経済を勉強した人の中で、どうも東大の人は比較的チームを組んでわりと大きな仕事をする。慶応もちょっとそういうふうなところがある。ところが、一橋の人は全然チームを組まないという印象が非常に強くありまして。

森田 それは現在じゃないですか。

松田 現在そうで、昔はそうでもなかったということですか。

森田 昔だって、それは別にチームワーク、チーム作業

というふうなものは、一橋じゃあまりありませんでしたけれどもね。しかし、それならば、慶応とか東大にそういうふうなものがあつたかという、土方先生の場合は別だけれども、あれ以外には、戦争前には東大にもそうないでしょう。慶応だって戦後でしょう。戦争前には、そんなものはどこにもありません。土方先生は1つの例外と考えてもいいし、また、あの人が初めてああいうふうなやり方を日本では始めたと考えてもいい。そういう意味では先覚者ですね。

松田 何でそういうやり方が一橋大学には突らなかつたのかというのが、ちょっと興味があるんです。というのは、実証分析がだんだん大がかりになるに従つて、一橋大学はそういうふうな意味では、実証に関しては後進国になりつつある。一橋の中で比較的チームを組んで大がかりな仕事をしたのは大川(一司)教授ぐらいで、大川教授は東大の出身だというふうなことから、一体一橋のどういうあたりがチームワークをつくれぬのか。

森田 けれども、一橋大学では、経済研究所というものをスタートさせていますね。経済研究所はそれぞれ別々の研究室を持って、自分の研究室に立てこもって、一城一郭の主というような顔でみんな仕事をしているんでね。

松田 中にいて、非常に変な感じがしまして、こんなんなら学部にいるのと大差ないじゃないか、ただ講義の負担がないだけじゃないかというげんがな感じがします。一橋大学の中に、何かチームワークさせないような学風でもあるのかしら。私、一橋から見ると、外の間人なものですから、そののところ、一体何なんだろうという気がしまして。

森田 それは1つの問題ですね。

松田 小樽高商というのは一橋出身の先生が非常に多くて、小樽高商の後身の小樽商科大学というのもチームワークが下手なんですね。お師匠さんがチームワークが下手だと弟子も下手なのかと思って、考えていたこともあるんです。

森田 しかし、いまの東大でもそういうチームワークあるかな。

松田 たとえば、さっき名前の出ました中村隆英先生なんか、わりに上手に組織なさいますね。歴史研究の中に実証研究持ち込んだり、かなり上手にチームでやっている。それから外へ出た方たち、ICUに長かった福地さん、あの人も、チームつくるのが非常に上手な人ですね。

森田 これは社会科学、経済学の面でも、世界的な傾向ですわね。そういう意味では、だんだんそういうふうにはチームで仕事をすることをしてないのは、少し後進的で、おくらしているのかもしれないけれどもね。

竹内 私、いま東北にいまして、一橋と違うのは、おそらく伝統のせいですか、講座制ですね。これは一橋とかなり違う面があると思うのです。そういう伝統を考えてみますと、もしそういうことがあるとすれば、それも1つの原因かなという感じもしないでもないんですけどもね。

森田 ですから、講座制というのも、一城一郭の主が1人という意味でなくて、本当の講座は教授、助教授、助手というような、ある1つのチームなんですけども、それが助教授は次の教授を夢見て、助手は次の助教授を夢見るといような縦割りばかりで、グループになら

ないんだよね。講座制というのは、別にいま日本の大学は、本来すべてそうなんですけれども、そういうことからいうと、東大にそういうふうなグループ研究が芽生えていて、一橋に芽生えないという問題にはならないわけなんだけれどもね。

松田 たえば、一橋で統計学の教室とって考えてみますと、先生のお残しになられた方、それぞれ皆さん、鍋谷（清治）先生にしても磯野（修）先生にしても、優秀な先生だと思えるんですけども、実証とは無関係な方をお残しになって統計学の教室を編成された。それはそちらの方が、より一橋にとって重要だとお考えになって……。（笑）

森田 それは別に私は意識的にそういうふうな人を残していったのではなくて、結果としてそうなったんでね。（笑）

松田 これはオフレコでも構いませんけれども。

森田 そして何というか、学問の仕方ということよりか、その人々の個人的な、人格的な素質ですわね。

竹内 最近、講座制でも、いわゆる大講座制というのですか、これが大学で文科系、経済学関係でも若干取り入れてきている面がありますけど。

森田 そうですね。これはしかし、そういう大講座制で、それならば、そういう大きな枠でチームワーク的に研究を続けていくかということ、それはやっぱり、それを構成している人のやり方によるんじゃないでしょうか。そうするとさっきの問題になってきて、その人の勉強の仕方ということになってくるんでね。

ただし、学問の発展傾向としては、やはり経済学

といえども社会科学といえども、一人でやっておったんではそう大きな仕事はできないんで、やはりチームを組んでやらないと、本当にいい仕事はできないような時世になりつつあるような気が私はするんですけどもね。

竹内 特に理工系の学部なり研究所を見ていますと、東北の例ですけれども、もちろんほかも大体同じだと思うのですが、ある研究論文なら研究論文で、執筆者は共同執筆、ときには5人とか10人とか名前が出てきたり、教授は何かというと、講座の教授はその研究チームのオルガナイザーでしょうか。したがって、たとえば大学院生や助手でも、本来自分の狭い範囲の研究には直接関係なくても、ほかの人にサービスするとか、たとえば、ある助手なら助手が今度学会でこういう発表をするから、大学院の学生にこの実験をしてくれとか、そういうこともあるらしくて、いろいろな実験自体も、かなり共同的な面が、最近では強くなってきていますね。

森田 それは特に自然科学の方は、もともとからそういう体制が進んでおって、ことに自然科学の研究の場合には、若い人の方が本当は能力があるんだよね。ところが社会科学の面では昔から年の功というものは、自然科学に比べると、かなり強かったのですが、それはしかし、特に近代経済学ではだんだん自然科学の方向に近づいてきて、実際にいい仕事をするのは若い人が多くなったし、そういう人がチームを組んでやる場合にいい仕事ができるというような面が、自然科学と同じような形でだんだん社会科学の中にも浸透してきたと私は考えるのです。

そういうことで、最近の、たとえばアメリカの統計学会の雑誌見ておっても、あそこの中に出てくる問題は社

会科学一辺倒じゃないですけども、共同研究が非常に多いですね。ですから、そういう点で、もし日本の現状がそうでないとすれば、日本はちょっとおくられているんじゃないかな。

松田 そこでもう一つ、私、不思議なのは、先生は、統計局という大きな組織をほぼ10年間局長として指揮なさっていて、せっかく一橋にすっかり戻られてから、統計局の局長であったときのようにチームをつくってやらなかったのはなぜなんだろう。もうそういうふうなことは飽きちゃったということかなと思ったんですけどもね。(笑)

森田 それはそうじゃなしに、年とっておって、だんだん能力が、もともとない能力がますます落ちて、熱意もなくなって、そしてまた、ある意味では後から入っていったわけですから、遠慮もあったし。

松田 先生のような大先生でも遠慮があったんですか。

森田 それは途中から帰っていったんですからね。

松田 セっかく先生が提起された物価指数の問題にしても人口の問題にしても、あの後の発展というのは、若い連中を集めてチームを組んで、いろいろな形でやっていったら、もうちょっと一橋の実証研究というのも盛んになっていったんじゃないかと、ちょっと残念な気がするんですけども。

森田 そんな力ないですわ。

竹内 ちょっといいですか。

先生のご本を見ますと、渡辺孫一郎先生の数学なり、あるいは確率論ですか、あれが、先生の統計学の研究に

どのような影響があったのか、ちょっと伺いたいのです。  
 森田 それは、数学のことで教えを請う先生は、先生以外にはなかったわけですよ。それでいろいろお願いしたこともあるんですけども、先生は数学の先生で、私どもと考え方が非常に違う面がございまして、非常に数学的に厳密ですね。「この数学的な基礎をこういうふうに考えてやってみたんですけども、先生、これでいいでしょうか」と、持っていきまして、「統計はこんなことでいいんですかね。まあいいでしょう」といわれました。  
 (笑)

それはいまでも私、思うんですけども、数学専門の人と、社会科学の方から統計に入っていった人とは、そういう点では考え方がかなりずれてきますね。数学的に非常に厳密で、社会というものとは直接関係なしに、数学一辺倒で問題を考えていらっしゃるのと、社会というものを背景にして、その上で物を考えていこうということと、その辺がちょっとむずかしいですね。

竹内 それと関連しまして、「統計遍歴私記」の中に亀田豊治朗さんの名前が見えるんですけども、実は亀田さんが大正9年(1920年)に書かれた「簡易統計論」というのを、この間読んだんです。いまでいったらサンプリングでしょうか、そのときの論文を見ますと、有限母集団からの抽出を考えまして、繰り返しがある場合とない場合に分けて、いまでいいましたら、推定量の標準誤差なんかの結果もちゃんと出しておられるんですけども、それから応用として、たとえば大正9年にあった国勢調査とか簡易生命保険の実際の例をとりながら、母集団から一部サンプリングして、そのサンプルから推定した値

が母数と実際にどのくらい違うか、導出した公式と対応して、確率論的な評価もちゃんとやっておられるのです。

それから、昭和5年のISIの東京でのコンファレンスでも亀田さんは、大正9年の国勢調査をもとにしてサンプリング法の応用を報告されているわけなんです。それから、やはり「統計遍歴私記」によると、簡易保険か何かの局におられて、日本統計協会の副会長か何かにもなっておられるのです。よい仕事をされているのに、数学の出身の方ですから、社会科学畑の統計学者にあまり影響なかったのでしょうか。その点、ちょっとお聞きしたいと思ったんです。

森田 それは先生は保険数学ですから、ああいうふうには大数の法則とか、そういったいまいわれたような研究、それは大日本統計協会ですか、あそここのリーダーをお願いした関係で、ああいうふうな問題をあそこに書いていただいたんですけれども、いまいわれたように、そのころの統計学とどういう関係があられたかということは、そのころの統計学がそういうふうなものをあまり要求してなかったということになるかな。

竹内 あまり直接的な影響は与えてないような感じがしますね。

森田 そうですね。

竹内 渡辺孫一郎先生も確率論で学位とられて、亀田さんが第2号ぐらいになるのでしょうか、確率論で学位とられた。この前、松下先生と話したときに、亀田さんの場合は、論文の中にはゼネレーティング・ファンクションか何か使っておられる。かなり確率の方では画期的な論文だということをお聞きしたのですけれども。社会調

査の面でサンプリング・サーベイということは全然タッチされてなくて、国勢調査とか生命保険の、そういう与えられた母集団からのサンプルで全数調査の結果と対比するということはされたんですけども、実際の社会経済調査で、初めから調査の設計の段階からサンプリング・サーベイするということはしておられなかったような感じですね。

森田 戦争前といえますか、昭和20年前ですね。そのころは日本の統計にはサンプリングというものは、ほとんど実際問題にも首を出していないし、それから理論の方でもそういう方面は、あまり社会統計の人は問題にしていまませんでしたからね。ですから、亀田先生、そういう数学者との交渉はあまりなかったわけですよ。

竹内 先生のご本の中に、戦前の日本統計学会のメンバーの中に、統計数学の人が非常に少なかったということをお書きになっておられますけれども、そういうもののあらわれか、あるいは若干入っておっても、そういうものの影響はなかった……。

森田 なかったというか、数学の方の人でもあまり積極的に統計の実際の方にコミットしてこられなかったし、むしろこちらの方から、2、3の人はできるだけ近づこうとして、若干関係ができた。

ある意味で個人的な、たとえば横浜高工の安川数太郎先生、あの人は私の隣組だったから。鶴見で私の住んでおりました東寺尾の、ちょっと100メートルばかり先に先生おられました、ときどきお伺いして、いろいろなお話し伺っておったんです。そんな関係で、統計学会できたときに先生に入ってもらって、それでいろいろ数学の方

の人の連絡役をしてもらった。そういうふうな個人的な関係から少しずつ、だんだん引、張り込んでいったというか、こうで、たとえば北川敏男さんにしても、あの人は全く統計のことは、最初は統計やるつもりで統計やったんじゃないんだね。(笑)だから、統計と思わないで、ああいう仕事をやられたんですね。推計学でしょう。統計という言葉を使うのはいやだったんですね。

ですから、ちょっと戦争前のことは、これから皆さん方がもう少しそういう資料を集めて、その実態を分析してもらおうと、本当のことがだんだん出てくるかもしれぬな。われわれは既成のある考え方を持っているから、かえって公平でないかもしれないけど。

松田 いまのお話を伺って、そっちの話の続きもちょっと伺いたいなと思って整理していたんですけども、先生は、寺田寅彦さんが非常に例外的な自然科学者で入っていたというふうにお書きになっていましたけれども、学会の中で会合には出ていらっしやらない……？

森田 最後までノ遍もありません。

松田 そうすると、会費だけの会員……？

森田 そうです。私も実際お目にかかったことがありませんしね。ただ、先生が書かれた「寺田寅彦全集」に出ているいろいろな統計学的な随筆は、非常に私にとっては強い印象を残していますね。

もう一つ、森鷗外も、統計協会から出した「統計学雑誌」「統計集誌」の論争の中に出ている。あれも印象的でしたね。ああいうふうな非常に新しい考え方が、明治の時代にあったということですね。そういう点では、統計学をやっている人よりはずっと先生の方が統計的だよ

ね。

竹内 それから、この中にありますように、日本統計学会に数学出身の方があまり入っておられなかった。森田先生初めリーダーの方々が、なるべく統計数学でしょうか、数学出身の方に会員になってほしいと強く要望されておられた。

先ほど、私、早目に来まして、守岡さんと話していたんですけれども、先生が、ここにもありますように、統数研の掛谷先生、所長でしょうか、いろいろ話をされて、それで統数研からも何人かの方が統計学会のメンバーになられたとか、先生が22年の1月にこちらの局長になられて、統数研から守岡さんが22年の6月か何かはこっちに見えたということも、さっき、実はいろいろ話していたんです。

松田 統計数理研究所は、たしか戦時中に、戦争協力のために設置した研究所というふうに聞いていますけれども、あれの設置の際には、社会科学系の統計学の方は、全然関係ないのですか。

森田 全然関係なかったですね。

松田 どういうわけであれば……？

森田 ですから、あれは数学研究所なんですよ。数学の方にウエートがあるのよ。しかしやっぱり戦争中、何かもう少し戦争に役立つようなものでないとできなかつたんじゃないですかね。そういう意味で「統計」をつけたんだというふうに聞きましたかね。

竹内 あの当時は所員も数が少なくて、先ほど守岡さんと話をしていたんですけれども、松下先生が19年6月、夏でしょうか、東大の助手からそっちに移られて、9月

か何かで河田龍夫先生、坂元平八先生、守岡さんの3人一緒か何かで統数研に行ったという話をちょっとお聞きしたんですが、その当時の所員は非常に数が少なかった……？

森田 それは非常に数少なかったでしょうね。

竹内 ですから、所長以外ですと数名……？

森田 何人ぐらいだったですかね。あれは青山博次郎さんが定年でやめられるときに、青山さんの記念報告があったんですよ。そのとき私も行ったんですけれども、ずっと統数研の初めからのメンバーの所員のだれそれは、いつ就任して、いつやめたという表を全部つくっておりました。そのプリントもらってきたんですけども、どこに行ったかな。それは初めのうちは非常に少なかったですね。

松田 それで局長時代の話に戻りますが、先生が局長に引張り出された一番の原因といいますと……。

森田 それは「統計遍歴私記」に書いておきましたけれども、高橋正雄君が火つけ役ですね。戦争に負けた年、20年の暮れだったですね。渋沢さんが日本銀行の総裁をやっておられた。渋沢さんというのは大正10年ごろに東大を出て、名家ですから、まだそうお年寄りじゃなかったけれども、日本銀行の総裁をしておられたんですね。高橋君がその後輩だったんです。大内兵衛先生は渋沢さんの先輩なんだけれども、戦争中ずっとページで逼塞しておられて、渋沢さんが日本銀行の中に別に研究室をつくって、そこで大内さんに仕事をあげておったわけです。日本の明治時代の金融史を、大内さんはそこで編集して

おられた。

そういう関係があったんですけれども、高橋君が戦争が終わった年の暮れに「戦後日本の立て直しにはどうしても統計が必要だ。日本復興は統計の方から仕事をしなきゃいかぬ。」と渋沢さんを説いて、そういうチームをつかって、そして政府の復興の仕事を助けていこうというので呼び出されまして、渋沢さんの家へ、たしか高橋君と有沢さんの3人ばかりで行って、現在の日本統計研究所をつくる相談をしました。それで、大内先生を代表にして仕事を始めたわけなんですよ。

松田 実際あのとき、近藤康男さんは前から農林省の統計調査をずっとやっていたらして……。

森田 それはずっと後のことですね。

松田 それからもう一人、後から鎌倉市長になった……。

森田 正木君。

松田 皆さん、どちらかというとなりがちで統計調査のキャップになられて、実際どうやって動かしたんだろうかと。(笑)

森田 キャップになったといいますけれども、戦争でめちゃくちゃでしょう。占領軍の指導を受けて、日本で政府の機構も新しく作り直すということで、がちゃがちゃやっておったわけですよ。これは「統計遍歴私記」に詳しく書いてありますから、あまり重複する必要ないですけれども、少なくとも統計の面につきましては、いまいった日本銀行から資金をもらって、いまの日本統計研究所をつくりまして、そこでそういう連中が集まって、日本の戦後の統計行政についてのいろいろな研究をしておったわけですね。

たとえば日本のいまの統計局の物価指数をスタートさせるために、いろんな実態調査をしなきゃならないといふので、そういうことをそこが中心になっていろいろ準備をして、統計局の仕事をバックアップしておったんですね。あまり正確な表現じゃないんですけども、実質的にはそういうことだったんです。そういうことから、だんだんと政府の仕事にコミットしていきました。

政府の中にいまの経済企画庁の前身の経済安定本部がありました。そこで山中四郎君が仕事をしておったわけですが、その方へも占領軍の方からいろんなコミットがあったんでしょね。

特に問題はお米のことだね。戦争に負けた昭和20年は天候も非常に悪かったですけれども、空襲空襲でおちおち畑の仕事もできませんでしたし、畑やたんぼには年寄りと女ばかりで、若い人はみんな戦争に駆り出されておった。そういうこともあって、非常にお米の収穫が悪かったですね。大体、米というのは勝手に手に入らず、統制、統制で配給だけですから、みんなお腹減らしておったわけですよ。その配給については、それぞれの県の知事が責任を持ってしまして、たとえば新潟県のような米がたくさんとれるところは、その余った米をほかに回さなきゃならないんだね。ところが知事としては、どうしても自分の管轄している県の食糧を確保する責任がありますから、なかなか出さないんですよ。知事さんがうそをついて、実際の報告を正直にやらないんです。そういう状態でした。

そこへ占領軍がやってきて、人間腹が減ると悪いことをしますから、とにかく食わせなきゃならぬ。日本人に、

食糧を供給するという事は、占領政策の第1目標ですよ。足りなければ、外から持ってきてやらなきゃならない。占領の始まった昭和20年に統計をとってみたら、日本人が食う米の3分の2しか収穫がない。そうすると3分の1足りないですから、1日2食しか食べられないわけですよ。そんなことできませんね。どうしても足りない米はもらわなきゃならない。それで、吉田さん(茂・元首相)がもらいに行ったわけね。ところが実際は3分の2というのほうで、こちらから注文しただけのお米はなかなか入れてもらえず、3分の1か4分の1しか入れてくれなかったんですね。それでも、もちろん少しは死んだやつもありますけれども、日本の政府がいったようなことにはならなかったわけなんです。

それで、日本の統計はでたらめだというので、統計をしっかりとしろということを政府がいわれて、そこで、山中君なんかがおった経済安定本部が、日本の統計をやり直さなきゃいかぬと進駐軍にしりをたたかれた。そういう事情もありまして、その相談をいまの日本統計研究所へ持ち込んできたわけなんです。そこで、そういうふうな合作の仕事が始まったわけね。それから、「統計遍歴私記」に書いてあるとおりの進行なんですね。

それで、日本統計研究所にたむろしておった連中がだんだん政府の仕事にコミットしていった、そういった臨時の委員会をつくり、半年ばかり議論して結論を出しまして、昭和21年の末に、統計制度の再建についての答申を政府に上申したわけですよ。その結果、統計委員会、それから各所の統計の中心機関になる統計局なり統計部なりを強化する、地方は地方の組織を強化する。初めは、

地方の統計は全部中央で統制するという考えだったんですけど、それは結局日本の実情に合わぬ、しかし、費用だけは中央政府が保証してやるというんで、最初は市町村まで全部、統計職員の給料は中央の予算で流しておったわけなんです。

そういうことで、日本の統計を新しくやり直す、いままでの人間じゃダメだからというので。ダメだっていうのは、戦争中、統計機構が非常に弱体化されておりましたから、人間の数も減っておったし、大体あまりしっかりしたところは残っていなかったわけなんです。それをやり直すというんですから、それは少なくとも一番トップは専門家にやらせようじゃないか、外国では、統計官僚というのはそれぞれエキスパートがやっておるんで、普通の役人じゃないですからね。アメリカさんの指揮で専門家にやらせるということなんです。

松田 まだちょっと何となくイメージがわきませんで、一体、先生は局長室にどういうお顔をしてすわっていらっしゃって、どういう指示を与えると、戦後の統計調査が、いまみたいなサンプリングとセンサスの組み合わせのような形になったのかなと思って、ときどき考えてるんですけども。

森田 それは非常に恥ずかしい話で、局長になりましたから2〜3カ月たって、よっぽど頼りなかったんでしょ、うね、正木君——鎌倉市長になった正木ですがね、あれは統計のエキスパートじゃないんですけども、あの人は、多少左で、戦争中パージになっておったんですが、「森田は少し頼りない、統計の技術的な方は森田でもいいけれども、行政的なことは少し突っかい棒がなくては

危ないから、正木君をつけてやろう」といって、3カ月から4カ月たってから彼が来たんです。

私自身わかりませんが、とにかく初めのうちは頼りなかったのかもしれませんが。最初のころは、地方の統計職員をもう少し技術的に指導しなさいかぬというんで、地方の人を集めまして、しょっちゅう講習会をやっておったんです。私なんかはそこへ出て講義しておったんですよ。「やっぱり森田は講義の方がいいぞ」「森田は講義をやらせたらなかなか元気がある」、そういううわさを聞いたことがありました。

でも、そのうちに商工省（通産省）の統計を拡張するというので、その局長に正木君は引、張っていかれたんです。そのときには、私も少しなれておったので、もう突っかい棒はなくていいだろうということになったんです。半年ぐらいでしたかね。ですから、4カ月目かに大内先生に呼び出されまして、「しっかりしろ」と喝を入れられおったんです。

松田 あのころは、意外に組合というのが強くなりかけていたころなんですね。

森田 そうなんです。非常に強かったですね。

私が局長になりましたから半月か1月たにぬうちに、例のマツカーサーのスト中止命令が出た、あの大変なゼネストがありまして、統計局なんかかなり先鋭分子がおったわけなんですよ。私はこんなだから、そういうやつとも別にけんかするわけじゃないし、そういう連中には私は多少話ができたんでしようけれども、あんまり抑え込むというふうな方じゃなしに、話し合っいていこうじゃないかということやっておったんです。

そのときじゃないですけれども、私が局長を10年間やってやめた後も、ずっと日本の組合にはそういう先鋭分子が残ってしまして、そのときにバージになった連中が人事院の方に訴訟を起こしまして、それがまだ解決していません。

竹内 統計局長時代に一番印象に残ったことはどういうことでしょうか。

森田 だらだら10年やっておっただけで……。

こういったらおかしいですけれども、地方の府県に仕事をしてもらう点では、私はよく話し合いをして、うまいことやっていたと思っています。そういう意味では仲よくなった地方の統計職員の方は非常に多いですよ。いまでもまだ何人か、毎年1遍ずつ集まって、1晩昔の話をし合うというつながりも残っておりますし、そういう意味では、10年間楽しくやっていたよ。

ただ、その間は勉強の方はすっかりダメになってしまった。ちょうど45から55までですから、あなたぐらいの年だな。

松田 そうすると非常に不思議だなと思ひまして、やはり先生は偉いんだなと思って。(笑)

森田 一番勉強できるときなんだ。その間そうじゃないですからね。それは、私のリストを見てもらってもわかりますけれども、本当に恥ずかしいですわな。

竹内 しかし、先生は本当に局長やっておられながらも、研究の方でも、俗世間的な表現ですが、まじめに研究をちゃんとやられました……。

森田 研究の方は本当に恥ずかしいけれども、やっぱり、こういう役所の仕事をしていながら勉強ということはどう

きませんね。その間、ずっと一橋の講義を続けさせてもらったから。それがなかったら、おそらくもうダメだったでしょうね。

松田 そういう意味では、一橋の講義は先生は楽しくおやりになった……？

森田 それは楽しいというか、頭の方の老化防止にはなったですね。役所の仕事ばかりやっておいたらバカになったでしょうね。それだけ、役人としては決して優秀な役人じゃなかったでしょうね。

松田 しかし、戦後の統計制度のかなめのときをつくられたわけですから、戦前と戦後との間の内閣統計局時代と総理府統計局時代とでは、ずいぶん大きな断層がございますね。

森田 何というんですかね、私がやっておった10年間の統計局というのは、やっぱりほかの役所と気風が変わっておったんでしょうね。ですから、職員の上下の関係とか、横の関係とか、そういうことは、ほかの役所のような、いわゆる官僚的なあれはなく、おそらく気分がちょっと違っておったんじゃないでしょうか。ですから、ほかから統計局へ来た人は、統計局というところは非常に気持ちのいい役所だといっていました。

山中四郎が一時うちの総務課長だったですね。その時は庶務課長といたんですけども、那須さんという人が病気されて、ちょっと仕事を外れておられたんですよ。その間、山中君に庶務課長を兼務してもらって来てもらったんです。そのときは、いまの統計基準部、そのころの統計基準局の総務課長を美濃部さんの下でやっておったんですけども、彼は美濃部さんとあまりよ

く合わないんですよ。しょっちゅう私の統計局の方へ来て、統計局の仕事をやっておったですよ。非常にこの役所の空気はいいって喜んでいましたわ。山中君は美濃部先生さらいだったですね。(笑)

竹内 やっぱり、先生の人徳のしからしめるところですね。

森田 いいや、そんなこっちゃなしに、やっぱりそれは生まれつきですから、いいところもあるんでしょうけれども、悪いところもきつとあるんでしょう。

松田 ただ私、ちょっとこのごろ気になってますのは、さまざまな最近の統計局の標本調査はどうもかなりデザインを変えているらしいんですね。その前のところの説明というのは、初期のままの引き写しみにいにして、ほとんどその解説を変えてない。どうも、先生の時代から見ると、かなりサンプリングデザインの勉強が手薄になってきているんじゃないか、そんな感じがしてならないんです。

森田 とにかく、初めはそういう専門家を集めたですよ。たとえば統計局の6級職の職員の採用をするのも、私が自分でやっておったですから、数学の連中どんどん採ったですね。ところが私がやめましてから、そういう職員の採用は個々でやらない。総理府の本部で一括してやって、それを各総理府の中へ回すということになりました。もう専門家の養成ということとはなかなかむずかしくなってきたんです。そういう意味で、いまはおそらくエキスパートが少なくなっていますね。

竹内 こちらでいう研究部の陣容はどうなんでしょう。

森田 研究部というのはないね。これはいまなら、何て

いのか。機械関係が1つあります。

松田 何か、かろうじて研究官みたいなのが1ポストか2ポストか残っているということ、ちょっと聞いたことがあったんですけども。

森田 それはここだけの問題じゃなしに、日本の政府機構一般にそうですけれども、やっぱりエキスパートが育たないんですね。特に統計なんか、そういうところにずっとおりますと、うだつが上がらないんだよ。昇進の道がないんですよ。ですから、ぐるぐる回さないで昇進できないわけなんですよ。

新しい公務員制度ができたときに、そういうこともちゃんと技術系統で分けまして、一応それでやっていけるような収入を考えたわけなんですけれども。これはどうしても日本の官庁の体質だと思いますね。

昔は、技官と事務官とは並行しているんですけども、技官というのはちょっと格が下だね。少なくとも一番上までは行けないんだよ。技術系統で次官になるということは非常にむずかしいんです。技術系統の役所でもなかなかなれませんわね。そういう点で非常にむずかしいんですよ。

それが、戦後、統計というのは技術官庁、特別の専門家でないといけないという空気が、少なくとも占領中はそういう考え方でアメリカは指導しておりましたし、私の時代はそういう時代を受け継いでおったんで、多少そういう考え方で運営しておったわけですけども、それがいまは完全に崩れてしまいましたね。

松田 戦前に戻って調べてみますと、農商務省時代はわりとしっかりしているんですけども、あれが農林省と

商工省に分解したあたりから、何かおかしくなっちゃったですね。通産省になると、すっかりガタが来る。私が調査制度を追いかけて行ってそんな感じがしました。

森田 農林省というのは屋台骨が大きいですから、大きな予算を抱えておる。そして、いま農業というのはだんだん小さくなっている。その小さい農業の上に、農林省自体は昔のままで乗っかっているんですから、そういう余裕はあるんですよ。ですから、おそらく統計につきましても、伝統的に多くの仕事を持っておりまして、その余勢をいまでも持っているという傾向はありますよ。行政整理のたびに、農林統計というのは整理の対象になるんですが、なかなか整理できないんですよ。それは反面から見れば、そこにいいものが残っているということになるでしょう。

通産の方はそういうことは全然ありませんから、新しい考え方でどんどん人を変えていっていきますけれども、エキスパートが育たないでしょう。きっとそうだと思いますね。

松田 話がちょっと戻りますけれども、先生と杉本栄一先生と、たしか同期ですね。あの方の文庫が、経済研究所の書庫の中に未整理でありまして、私、暇なときにながめていますと、たしか内閣統計局の戦時中の家計調査にいろいろ関係されたと見えて、いろいろな資料が出てきます。

杉本先生と統計局との関係は、どなたも何もお書きになってないんですけれども、先生ご存じでいらっしやいますか。

森田 それは、戦争中、私の前の局長さんの川島さんが

一橋の商科大学へ行かれました、商科大学の先生を頼りにして、戦時の家計調査をやったんです。

これは非常に細かい調査をされまして、戦時の日本の国民生活について、それこそ、経済学的な考え方に立脚していろいろなことを調べてみようという杉本君の意図がそこに働いている調査で、逆に統計の方から見ますと、非常に特殊的な調査になって、いわゆる大量観察的な正確度についてはどうかと思われる点もあったはずけれども、経済学的に非常におもしろい調査を計画しておったわけなんです。山田勇さんもそれに関係しておられたでしょう。ですから、山田君はそれについてきっと記憶があるわけです。川島さんは、もっぱら一橋の先生方を頼っておられたですから。

しかし、それはあまりにも細か過ぎるということと、戦争がだんだん深刻になってきまして、せっかくやっただけけれども、なかなかその整理に手がつかなかったということでしょうね。結局それは完成しないで、ごく一部分だけ製表して、それも公表されないで倉の中へしまってしまったんじゃないでしょうかね。

松田 結果表は出てないんです。労働者の部分の抜粋がちょっぴりあるだけです。

森田 そうでしょう。簡単なものが残っているだけだと思いますね。

川島さんは杉本君を非常に頼りにして、協力してもらっていたわけです。

竹内 先生、そろそろ5時になりまして、非常にお疲れになったと思います。

森田 大変申しわけなかったのですが、私自身、全然準

備していませんでしたから、もうちょっとデータを持って  
くればよかったのですが……。もし、もう一度機会が  
あれば、もうちょっと問題をしぼっておいていただいた  
ら、準備してお答えしたいと思います。

竹内 長時間どうもありがとうございました。

竹内 この前は戦前に焦点を合わせまして、先生に非常に広範な分野にわたりお話を承りましてどうもありがとうございました。速記を読みますと、所期の目的の大半は達成された感じがいたします。

この前のときは終戦前後、終戦間もないときまでだったんですけども、この前と若干ダブる面があるかもしれませんが、今回は戦後、あるいは全体を通してのいろいろなお話を承りたいと思います。戦後については、先生のご本(「統計適歴私記」)があるということで、戦後のことについては簡単にしていきたいと思っております。

ご本の中に、高野先生、大内先生の名前が出てまいります。高野先生と先生とのご関係と申しますか、そういう点でこのご本にないようなことがもしございましたら

.....

森田 そうたくさんはないのです。要するに、先生に一番近くお仕えした、というとおかしいですけども、接したのは1939年だったと思います。チェコのプラハで国際統計会議があったときに、私ちょうどヨーロッパに留学しておりました、それで日本からその国際統計会議に高野先生が日本代表でお見えになるというので、上田貞次郎先生から手紙をいただきまして、先生のお伴をしていけということで先生をお迎えした。

そののころをもうちょっと詳しくお話ししますと、先生の奥さんは、ご存じのようにドイツの方なんですよ。それは先生が若いときにドイツのミュンヘン大学に留学しておられまして、そこで下宿しておられたお家のお嬢さんと仲よくなられて結婚されたんです。その奥さんの

お母さんがまだ生きておられまして、もうお年寄りで目もあまりよく見えないうし、付き添いのおばさんと2人で住んでおられて、そろそろ養老院へ入ろうと準備をしておられたんですが、娘婿が来るというので、それまではちゃんと家を持って待とうというので待っておられまして、そこへ先生着かれたんですよ。

私もそこで先生をお迎えして、それから一緒にじゃないんです、別々だったんですけれども、そこで高野先生にお会いして、私は私でまた別の行動をしまして、どこだったか名前は忘れましたが、途中で先生と一緒にプラハに入りました。

そのときにちょうど倉敷紡績の社長さんの息子さんで、大原総一郎氏がまだ若いときです。大原氏は私と年はそんなに違わないのです。私より少し若いと思います。新婚ではなかったけれども、奥さんを連れてヨーロッパにいられた。たまたまそこで大原夫妻が——これは大原氏と高野先生は、ご承知のように高野先生がページでもないけれども、東大をおやめになって野に下られたときに、大原総一郎氏のお父さんの大原孫三郎、倉紡建設社の方がお金を出して、大阪に大原社会問題研究所をおつくりになって、その仕事を高野先生にお任せになった。そこへ例の教授ページで首になった大内兵衛、森戸辰男、その他もろもろの高野門下の人々がみんな集まって仕事をしておられたんですよ。そういう関係で、高野岩三郎先生は大原孫三郎さんを非常に恩に着ておられた。

その息子さんが来たというので、先生も非常に喜ばれてまして、本当にぼくは感心したけれども、大原氏夫妻を親身も及ばぬ世話をしておられた。それは見ておって齒

がゆいくらい親切な扱いをしておられたんですよ。つくづく感じ入りました。

その後は多分この本のどこかに書いてあると思うけれども、例のヒットラーがチェコスロバキアに侵攻してくるというので大騒動になりましたで、2日目にみんなあわを食って、国際統計会議もストップしてしまった。ですから、実質的には何もなかったんですよ。2日目の朝、先生と一緒に会場へ行きましたらガランとしているのです。聞いてみたら、もうきのう終わってしまったというんですよ。

そういうことで、先生と一番深くおつき合いしたのはそのときでした。高野先生は東大をやめられて、大原社会問題研究所の所長をして大阪におられる間に大病をされました、2年ばかり寝込んでしまわれたんですよ。その後東京に来られて、ずっと統計学会には第1回にも顔を出してくださいましたし、この統計協会の会合にも来てくださいましたし、そういうことでいろいろお世話になっておったんですよ。

竹内 先生は、プラハのISIのときには、高野先生とご一緒のホテルに泊まれたんですか。

森田 そうです。一緒のホテルに泊まりまして、先生にいろいろお話を伺ったのです。先生非常に穏やかな方だったんですけども、私の印象でびっくりしましたのは、事一たび教授ページの問題になりましたら、先生まなじりを上げて悲憤慷慨されました、日本政府けしからぬというので、そのときの先生のものすごい勢いにびっくりしました。

竹内 このご本にも少し書いてありますけれども、やは

り先生に直にお聞きした方が-----。

森田 戦後、先生はNHKの会長になられましたね。それで死なれたんですね。

竹内 プラハのときは前後幾日ぐらい-----？

森田 ご一緒に行動したのはせいぜい4～5日の話です。

竹内 会場はどこですか。

森田 開会式の会場は、チェコの国会議事堂だったんじゃないでしょうか。

竹内 川を隔てた向こうの丘にお城がありまして。

森田 そうでしたか。その場所の配置は忘れましてけれども、国会議事堂で開会式をやって、開会式は無事に終わったんですけども、その次の日の報告部会からいまいったようなことで、実質的には何もやらないで解散してしまったんですね。少しあわて過ぎたんですね。そのときは何でもなかったんです。やっぱりヨーロッパの人たちは、ヒットラーが暴れ回るというんで、みんな戦々恐々としておったんですね。

竹内 先生のご本の最後の方にも、戦雲というか、暗雲漂っているような感じがありましたね。

森田 それほどでもなかったんですね。高野先生、こういっちゃおかしいけれども、私は先生にそう深くあれしたわけじゃないのに、先生には非常にかわいがってもらったような気がしますね。そういう意味では、先生は人を引きつける人でしたね。

竹内 この前8月に先生からいろいろお話を承りましたときに、藤本先生の場合は保険論がご専門だった。統計学についての学問のことは、藤本先生からあまり-----。

森田 そんなことってでは悪いけれどもね。

竹内 先生が統計学の研究を進められました場合に直接的といいたいでしょうか、そういうあれは日本ではどなたが-----?

森田 あのころは先生クラスの統計学者は、みなどっちかといえば古い統計学をやっておられた。私たちの世代から近代統計学というか、ドイツ流から離れてイギリス流の統計学をやり出したわけですから、そういうふうな学問の系統上での先生というのは日本にはあまりたくさんいらっしやらないわけ。だから本で勉強した。

竹内 ユールとかボーレーですか。

森田 ボーレーあたりが一番そのころの新知識でしたね。ですから、記述統計学で、いまの推測統計学はまだ芽が出てない時代でしたね。

竹内 結局、森田先生が日本の統計学会においてはパイオニア的な-----。

森田 そんなことはないですよ。

竹内 新しく記述統計学から推測統計学に移り変わる時期といえますね。

森田 それはそうです。私たちの世代からそういうような時代が始まったわけですね。しかし、私の先輩もたくさんいらっしやいますから、私よりか先に、たとえばアメリカ、イギリスにいらして勉強してこられた方もあり、それはみんなそれぞれそういう新しい時代の息吹を浴びて、日本の中でどういう先生というのではなしに、世界の舞台で勉強してこられた方でしょうね。

竹内 基本的には先進国といいたいでしょうか、イギリスなりアメリカなりの一流の先生方を手本にされて、先生が

基本的にはこつこつ自分で研究を進められて、ご自分で切り開いてこられたと理解してよろしいのですか。

森田 数学の方は皆さんイギリスへいらして、ロンドンスクールですか、カール・ピアソン、フィッシャー、フィッシャー自身はあまり大学に関係しませんでしたから、あのころイギリスで勉強してきたという人は、ピアソンの記述統計系統の勉強をしてきたわけですね。

竹内 佐藤良一郎先生の「数理統計学と50年」を拝見いたしますと、ちょうどカール・ピアソンからE・S・ピアソンにかわったところで、E・S・ピアソンとネイマンにいろいろ指導を受けたということが書いてありますね。

森田 佐藤先生はお年を召していらっしゃるけれども、あの方統計学をやることになられたのはわりあい新しい。外国へ行かれたのもかなり新しいですね。

竹内 ですからあれを拝見しますと、先生と違いまして、文部省の正規の在外研究員ではなくて、私費を基本にして行かれたということですね。

森田 先生は高等師範出ですから、そういう意味もありましたでしょう。とにかく最初からあまりいいポストはお持ちになれなかったから、留学の順序がなかなか回ってこなかったんですね。だからしんぼうし切れないで、先生ご自分でいらしたわけでしょう。

竹内 佐藤先生がお書きになった連載物を見ましても、ロンドン大学では数学関係の方が何人が佐藤先生の前にも行っていらして、カール・ピアソンの指導を受けておられた。たとえば香川の北条先生、それから横浜高工の安川先生-----。

森田 安川先生もそうですし、それから山口高商に近藤

鷺という先生がおられた。この先生もやっぱりあそこで  
す。

ですから、皆さん数学の勉強をされて、おそらく日本の  
の大学では統計学ということではなかったんだろうと思  
いますけれども、イギリスへ行かれて、そういう統計の  
勉強をしてこられた。ですから、数学畑の人はみんなイ  
ギリスに行かれたんですね。

しかし、社会科学畑、経済畑の人はアメリカに行った  
んです。たとえば、早稲田の小林新先生はアメリカにい  
らした一番早い方ですね。アメリカで例のハーバード流  
の時系列分析をやってこられた。ですから、あれを日本  
に輸入したのは小林先生じゃないですか。

竹内 戦前の場合ですと、社会科学なり経済学出の統計  
学の研究者と数学出身の学者との交流は、ほとんどなか  
ったと考えてよろしいでしょうか。

森田 ほとんどなかったですね。私は一橋ですがけれども、  
一橋の数学の先生としては渡辺孫一郎先生がおられまし  
て、先生に数学教わったといっても講義を聞いただけで  
すけれども、統計でいろいろ使っている式の展開なんか  
を私なりにやりました、先生のところに持って行って、  
「先生、こういうふうにやったんだけど、これでい  
いですか」といったら、「統計ではこんなことでいいんで  
すかね」といわれた。先生は、近似関係を大胆にやるで  
しょう、そういう点を、こんなことでいいんですかねと  
いわれた。先生は数学者ですから、非常に厳格だった。

竹内 特に戦後になりましたからは、数学の出身の方、  
あるいは社会科学、経済出身の統計学者、統計学の研究  
家は、たとえば日本統計学会の会員としても数学出身の

方がふえてきました。その契機はどうなんでしょうか。数学出身の方が統計学会のメンバーになって、それから経済学出身の先生方と交流を持つようになった契機は、どういうところに求めればいいのですか。

森田 それはむずかしいのですけれども、あの本にも書いておきましたように、とにかく統計学会を始めたのは、ほとんど全部社会科学系統の若い連中なんですよ。しかし、別にそういう社会科学系統だけで統計学会をつくる、そんなある意味で排他的な気持ちは全然持っておったわけではない。ただ、そのころは数学系統の人で統計の勉強をしている人が少なかったんですよ。それでほとんど表面に出ていらっしやらなかった。

個人的に知己関係があるということですが、たとえば私、横浜におりまして、あのころ昭和6年ですから、結婚して家持って、その家が横浜高等工業（いまの横浜国大工学部の前身）の先生だった安川教太郎先生のお家とたまたま隣組だったんですよ。そのときにはもう学会ができておりまして、同じ横浜ですから、横浜高工に安川先生がいらっしやる、そして統計のことをやっけていらっしやるということを知っておりましたから、先生のところに行って、いろいろお話を伺ったりしたこともあったわけですね。そういう関係で、先生は一番初めから多分入っていただいたと思います。

あの本に書いてありますように、最初スタートしたときに、数学系統の方といえはほとんど4~5人しかいらっしやらなかった。しかし、それはそのころはっきり統計をやっけていらっしやることがわかっている方のほとんど全部ですね。そういう方は皆さん学校関係ですから、

案内状を差し上げて入会していただくようお願いした。しかし、そういう程度だったんですよ。それがだんだんと数学関係の方も皆さん勉強されるようになりました。しかし、なかなか枠が広がってまいりませんで、そこで一番問題になりましたのは、これもちょっとオフレコのことかもしれないのですが、北川先生が統計科学研究会をおやりになったでしょう。あのときに「統計科学」という言葉をお使いになったけれども、自分たちのやっている学問は伝統的な統計学と違うんだってって、推計学という言葉をおつくりになった。それを英語で何ていうのか知りませんが、そういう名称を独特に工夫した国は外国にはあまりありませんわな。やっぱり統計という枠の中で数学の人もやっておったんです。特にフィッシャーあたりもそうですね。ただ、フィッシャーはカール・ピアソン系統と仲が悪かったかもしれません。同じ畑の中でけんかしちゃった。同じ土俵の中でけんかしておったので、われわれ全く関係ないという形ではないです。しかし、北川先生も、それからもう一人増山先生はもっとひどいな。あの先生は、オレたちは全くそんなおまえたちの仕事とは関係ないんだということで、いまもそういうにおいが少ししないでもない。そういうことでなかなか入っていただけませんで、どこかに書いておいたかもしれないけれども、いつか統計学会やりましたときに、高野先生が、どうしてあの連中は統計学会へ入って一緒に仕事をしないんだと悲憤慷慨されておりましたがね。

しかし、それもだんだん入っていただくことになりました。北川先生が入会されたときの紹介者は水谷先生な

んです。どういう関係だったか知りませんが。

竹内 それから戦後の場合ですと、統数研関係のスタッフも、19年できたときに比べますとかなりふえまして、戦後その方々が日本統計学会へお入りになったということもかなりなモメントになっているんじゃないでしょうか。ちょうど先生が統数研に関連して、評議員か何か……。先生が局長になられたのは21~22年……？

森田 それはずっと後ですよ。統数研ができたのは、いまおっしゃったように19年ですか、統数研ができた起ころいは、本当は数学の研究所をつくりたかったらしいのです。ところが、時局柄そういうピュア・サイエンスは、この時局にそう必要ないというので、何か実社会に関係のあることということで統計をつけたというふうに私は聞いているんです。

統計という看板が上がっておりますから、私も2~3回お伺いしていろいろお話を伺ったことがありましたけれども、いずれにしてもあのときは、統計学会の活動も戦争中ですからあまりしておりませんし、学会と統数研と直接に交渉することもあまりなかったですね。

戦争が終わりましたして統計学会を再建するときに、その間に数学者で統計のことをおやりになる方もだんだんふえておりましたから、どうしても数学の方に入ってもらって協力してもらわぬと、むしろいままでみたいに居候みたいななかっこうでなく、真ん中で協力してもらわなければならぬというので、私たちが数研の所長さんの掛谷先生にお願ひして、ぜひ協力してくださいといった。それは再興のときですね。それで、そこに書いておきましたように3人ばかり入っていただいた。これはさっさ守

岡さんが間違っているといっていたけれども-----。

竹内 8月に伺った統数研関係のことで、何かちょっと間違っているということをおっしゃっていました。

森田 あるいはそうかもしれません。私の記憶違いかもしれません。最初に3人か4人推薦していただいたんです。いまの統計学会の会長をしている小川先生はそのときに入っているんですわ。

そのころからだんだんと学会の報告の中にも数学の先生の報告がふえてまいりました。ごく最初のうちは、私はここにおりました関係上、学会のお世話をしておりました。そういう関係で、この統計局の数学の連中にもできるだけ出て、いろいろレポートをしてもらいました。したがって、だんだんと数学のレポートがふえてきました。それは戦争後のことです。

竹内 その場合に特に戦後になりまして、標本調査でしようか、あれが非常に実際にも応用されるようになりまして、それも非常に促進剤になったんじゃないでしょうか。

森田 それは統計の実用面ということでは、実際そのとおりですね。統計調査に数学、教理が大きな役割りを果たすようになってきた。

サンプリングのことにつきましては、そういう考え方がはっきりしてきたのは、少なくとも日本では戦争中から戦後にかけてのことです。標本調査の問題とORの問題も戦争に刺激されて非常に進んできたんです。私はORのことはあまり知らないけれども、戦争中そういう空気がだんだん濃厚になってまいりまして、私も統計をやっておったものだから、そういうことについて多少相

談を受けたりしました。そうするとどうしても勉強しなければならぬので、学校の先生だからというので講釈させられた。そういうことで戦争中ORに関係した話をしたこともありましたね。

ですから、いまの参議院議員の後藤正夫さん、元基準局長をしていった後藤正夫先生は、私を初めて日本でORの勉強を始めたうちの一人だといって大いに推賞してくれているのですが、それはうそだと思います。ただ、いまの雑誌「統計」の前身の「統計学雑誌」の戦争中の版にORの講釈みたいなものを書いたことはあります。

竹内 それで見ますと、本当に後藤さんがいわれるように、日本におけるパイオニアの一人と考えると-----。

森田 そんなこと。パイオニアだったらいまもちゃんとリッパな活動をしているわけだけれども、ちょっとおちよっかい出したただけだ。最初だからできたんですよ。その後勉強なんか全然していません。また、勉強したって、それだけの下地がありませんから大したことできなかったと思います。しかし、そのころはあまり統計屋がいなかったから、私のような者でもそういうことをやらなければならなかったわけ。時代の要請に迫られてやったということですね。

竹内 戦前でも大学なり高等商業等におきましては、必ず授業科目で統計学はあったんじゃないでしょうか。

森田 それは大正の10年代から、これは中橋徳五郎という文部大臣の1つの功績だと思いますけれども、日本の高等教育機関の大改革をやりました。そして高等商業、高等工業という専門学校をたくさんつくって、大学もふ

やしました。そのときにそれぞれ、特に高等商業、大学にも統計学の講座を置くような機運に統計学そのものが進んできて、世の中統計時代になってきて、そういうものを置かないといけないという気風になってきたからだと思いますね。とにかくそういう専門学校、特に高等商業、経済系統の大学はそうです。

〔守岡隆氏出席〕

森田 ここにちょっと座ってください。話をそこに戻しましょう。

竹内 実は、この前8月ここで森田先生からお話をお聞きしたときに、このご本の中に戦後のことで、たとえば統教研から日本統計学会の会員に何名かを所長の掛谷先生から推薦していただいたんですが、時期的にはそのころのことなんですから、何かそれに関連したことで、森田先生が勘違いしておられるところがありとか……。

守岡 勘違いではなくて、ぼくの記憶と違うということなんです。というのは、河田龍夫さんは前から入っていたんです。ぼくと坂元さんはたしか一緒に入った。

ぼくが違うといいましたのは、最初昭和21年でしたか、東大であったはずですね。そのときにはぼくは出た記憶がないのです。

森田 あのとときはまだ教研にいらしたわけ。ここ（統計局）に来たのはいつ。21年にはまだここに来てないの。

守岡 記憶がないのです。こっちに来たのは22年5月です。

森田 しかし、21年のときにはあなたは出席されなくても、所長さんから3人ばかり、多分私が行ったんだと思うけれども、先生のところに行って、教研からも統計学

会にひとつ入ってください、協力してくださいとお願いに行った。それで所長個人も入っていただいたと思うけれども、そのほか2~3人推薦していただいたんだよ。

守岡 そうだと思います。

森田 その中にあなた入っているの。

守岡 入っています。それから坂元さんも入っています。

森田 いまの統計学会の会長をしている小川さんは-----?

守岡 あれはまだそのころいましてから。

森田 そうですか。そこにだれを書いたんだったか、3人。

守岡 ですから、河田龍夫さんが前から入っていなければ、そのときに入ったんだと思います。

森田 そうでしょう。とにかく3人ばかり所長さんから推薦していただいて入った。

守岡 小川さんは入っていますね。ぼくもはっきり知らないのです。小川さんは数研に入ったのは20年なんです。

森田 あなたは何年に卒業したの。

守岡 ぼくは19年の9月なんです。

森田 それですぐ入ったの。

守岡 そうです。6月にできて、そのときにすぐに入ったのは、兼任の人は別にして、専任として入ったのは河田龍夫さん、それがボスで、その下に所員として松下嘉米男さん、それから坂元平八さん、その2人だったんです。それが6月からです。

9月の25日にぼくは卒業して入ったわけですね。20年の2月に私の家が焼けたんですが、20年の3月ごろに数研が疎開したんですよ。その疎開する直前に、小川さんと水野さんが入っているんじゃないですか。

森田 この間、青山君がやめるときに、詳しい非常に細かい系統図を印刷して配ってくれましたよ。1人ずつ、いつから入っていつやめたという……。

竹内 戦前の日本統計学会では、社会科学、経済学出身の統計学者と、数学科出身の方たちの交流がほとんどなかったんですね、数学出身の方の数も少なかったです。それが戦後になって急にふえたわけですけど、戦後、数学関係の方が日本統計学会の会員になって学会が発展したモメントをちょっとお聞きしたいんです。

森田 それはいまいったように、数研が中心で、だんだんと数研の人が協力してくれるから、数学科の人もだんだん学会に興味を持ってくるようになった。

竹内 大学関係でも、理学部数学科出身の後輩なり同僚に、だんだん網の目が広がっていったと理解していいんでしょうか。

森田 そのとおりじゃないですか。

守岡 統計学会が盛んになったということですか。

竹内 日本統計学会の会員として、数学出身の統計学の研究者は、戦前ほんの数えるほどしかおられなくて、社会科学なり経済学出身の統計学者と数学の方とあまり交流がなかったわけですね。

それが戦後になりまして、わりあいと交流も密になってきましたし、それから統計学会の会員そのものとして数学出身の方もふえてきたわけですね。戦後に、日本統計学会の会員として数学出身の方がふえた契機といいましょうか。

守岡 それはやっぱり森田先生がやられたわけですね。数研の側としては、そこに書いておられたわけでしょう。

森田 掛谷先生が喜んで協力を約束されて、私の記憶では、小川、坂元、守岡、3人が入会した。

守岡 それは間違いないですね。

竹内 やはり統数研が核になって、それから大学の関係者といいたいでしょうか、そういう人脈等々を通じまして、たとえば大学のスタッフ、数学出身の統計学関係の方々も学会にお入りになられたと基本的には理解していいんでしょうか。

守岡 あまりいいことじゃないんですけど、日本統計学会を盛り立てた数学の人というのは数研の人なんです。数研がなったわけですね。数学とか何とかの系統で統計に関心を持っている人はほかにいっぱいいるわけですね。いろんなグループがあって、日本統計学会とは関係なしに、自分たちだけでそれだけのことをやる団体とか、いろいろグループがありましたけど、そうじゃなくて、数研の人は日本統計学会を中心に、そこで自分のいろんな研究を発表した。日本統計学会を大きくしたのは数研の人なんです。

森田 これはオフレコかもしれぬな。

竹内 オフレコといわれますけれども、客観的な材料としまして、将来、私ども若輩ですけど、新たないろんな日本の統計学の発展の歴史を見れば、学会の役目は非常に大きいですから、その場合のいまいったような契機は何かということ記録にとどめておくということは非常に意味のあることです。

森田 これもオフレコですけど、私が戦後、統計学会の世話をしておった、これもよくないことです。私がこの局長をやっておって、そしてここで学会の世話をして

おった、それはよくないことです。それから、それを数研へお渡ししたことも、これは考え方によってはよくないこと。数研というところに日本統計学会の本拠があって、数研で取り仕切っているということは、それなりにその影響は出てきますから、本当いけばやっぱりそうじゃなしに、もっと中立といいますか、第3の場所で、そういうお世話にならないような形で統計学会が経営されることが一番望ましいことだと思いますけれども、しかし、ちょっとまだそんな力はないわな。

竹内 ですから、やっぱり一番大きな問題は、予算の規模なり何なり、財政的なものが一番大きいでしょうし、いままでの発展の歴史を見た限り、先生のようにプロモーターになる方がおられませんと、なかなか学会というのは動きませんし発展しませんから、歴史的に見ますとこれは非常に大きな意味があると思うんです。

森田 戦争前は、これは自主的に私がいろいろ小使いをしておったわけなんですけれども、そういうヤドカリの宿はなかったわけなんです。形式的には事務所は東京商科大学に置いておりましたけれども、ただ名前だけで何も関係なかったです。

そのときは非常に小さい世帯でしたし、仕事も小さかったですし、それはそれでよかったですけど、やっぱりいまは会員の数もこんなに2000人近くなって、ちょっとそれはむずかしいでしょう。自分自身で世帯を持つだけのかい性がなければ、どこかにヤドカリせんならぬ。もうちょっと大きくなって、そして数研が度量を発揮してそれへ渡すということになってくれれば……。

しかし、いまの日本の学会、いろんな学会ありますけ

れども、たとえば医学会とか、金融学会というのがありますね。これを銀行協会というようなものが世話をしている、これならまだいいと思いますよね。しかし、学会は学会だけで経営していくというのは、日本の学会でいまのところまだそういうところへいっている学会は少ないでしょうね。

竹内 現在のOR学会の場合には社団法人になっておりまして、たしか学会の事務は、学会センターかどこかに頼んでやっているようですね。会費が高いです。たしか今度値上げになりました、1万突破したんじゃないですか。去年までは年間9000円の会費だったんですけど、ことしから1万突破しました。

森田 たとえば、イギリスのロイヤル・スタティスティカル・ソサイエティーだって、名簿を見てみるとずいぶんメンバーの数は多いし、アメリカのだったらもっと多いですね。ですから、それだけのメンバーを持っておれば、会費で十分建物も職員も維持できるでしょうけれども、1000人程度のものじゃどうにもなりませんわな。

竹内 たとえば、いまISIのコンフェレンスがブエノスアイレスで開かれておりますけれども、あれなんかはどうなんですか。会費というのはたかだか1万円前後なんですけど、各国とも援助金が出ているんでしょうね。

森田 そうです。それは日本だって日本政府がやっぱり一番国としてコントリビュートしていますしね。それぞれの国が多少そういう拠金はしております。ですから、オーディナリーメンバーの拠金は本当にごく一部分です。それでもなおかつ財政は相当苦しいでしょう。オランダの本部には10人といないでしょう。ですからきゅうきゅう

ういってますわ。

竹内 ああいう出版物を出して、一々会員に送ったり、ニュースレターが来たり、あれだけでもかなり金がかかると思うんですけど。

森田 そんなことで、いまISIだって昔みたいにやかましいこといわんで、どんどん会員をふやしていってますわな。昔はやかましいこといってなかなかふやしてくれなかったですけども。定員を決めましてね。

竹内 そうしますと、また戻ってよろしいでしょうか。

さっきちょうど戦前における高等教育機関における統計学関係の授業科目、これは特に高等商業の場合ですとどこでもほとんど持っていた。

それでさっきのことと関連しまして、その当時統計学の専門家というよりは、ほかに授業科目を持っていて、統計学は副次的といいましょうか、そういう方がかなり数多かったんじゃないかという感じがするんですけど、先生もたとえば横浜高商の場合に金融論と統計学、先生の場合は、統計学プロパーで、金融論がどちらかという<sup>と</sup>大学時代のご研究ですと副次的なものだったんですけど。

森田 それはひどいもんですよ。私が横浜へ行ったときは創立2年目で、1年生と2年生しかないんですよ。統計学は3年の講義になっておったわけですから、2年のときに「金融論」やらされたんです。私、一橋で聞いた金融論のノート、そのままいっちゃ悪いけれども、それを土台にしてノートの種本つくって、それで講義したんですけども、そういうことですから、統計プロパーでというのはずっと後になって、よほど学校が大

きくなってからで、大抵の先生は、特にいまの数学の先生方は数学と統計とやっておられましたよ。それはその方が楽だったでしょうね。

ですから、高等商業でもいまいったように山口と四国の高松、この2つは数学の先生でした。そのほかは大体社会科学系統の先生がほかの科目を何か持ちながらやっておったですよ。ぼくなんか統計プロパーのつもりでおったんですけれども、逆の人もあります。たとえばこれは国立の学校じゃないですけれども、いまの早稲田の床次常次郎、統計学やっておったです。しかし、彼は財政プロパーです。そういうふうな先生もたくさんありました。

竹内 私の学生時代も、一橋では中山先生と杉本先生が交代で統計学持たれたんですけれども、メインの方は経済理論ですか、それから森田先生が兼任だったでしょう。局長でこちらにおられるときに、一橋に毎週/遍お見えになって統計各論という講義をなさった。

森田 そうでしたね。それは戦争の後の方、19年ぐらいから、兼任講師で各論の方をお手伝いに行っていて、それがずっと続いておったんです。ですから、中山先生にしても杉本先生にしても、統計学なんかやるのいやでしょうがなかったんだな。それで、ぼくに来いということになったんですよ。

竹内 私は学生時代、中山先生の統計学も杉本先生の統計学も講義は聞いていないんです。いまでいう単位は取っておりません。中山先生の原論は出席しておりました。それから先生の統計各論はちゃんと毎週出ておりました、単位はいただきました。

森田 それはどうもありがとう。

竹内 やはり戦前は専門家が少なかった-----。

森田 専門家が少なかったということもありますし、その当時の専門学校ではやはり大体が必修科目で、選択科目というのはほとんどありませんからね。科目数がそう多くなかったんですよ。そして先生の数も限られていますから、先生が何か2つ持たなきゃ-----。1つがメインで、もう1つの方は片手間ということですからね。どうしてもそういう形になるんですね。

竹内 それから、いままでのお話の延長といたしまして、先生の何十年にも及ぶ統計学のご研究と教育の問題について、先生のいままでの何十年というご経験を通して、いろいろご意見あるいはご主張、あるいはご感想お聞かせいただきたいと思いますと思うんですけれども-----。

森田 何ていうか、とにかく昔の統計と違いました、いまの統計は、非常に幅も広く、奥行きが深くなってきた。昔は1人で何でもやりよって、それである程度こなせるような間口と深さだったですけども、いまとてもそんなこといけませんから。私なんかどこへ行ったって何にもわからないような学問の広さ、深さになってきたですわ。

ただ、これはどこの学会でも共通の悩みだと思えますけど、そういうことになったために、共通の広場というものもがだんだん持ちにくくなったわけですね。そしてそのために学会の経営というものがむずかしくなってきた、たとえば日本で申しますと、日本だけじゃないでしょうけれども、計量経済学が離れてしまったですね。経済学

部門での、つまり統計と密接に関係のあるそういう実証的なものが、統計の畑の中でやるよりか独立してやった方がまとまりがいいということで、国際的に計量経済学、エコノトリックス・ソサイエティーがああいうように離れてきましたし、日本でも理論経済学会が、そして経済学の畑で統計的な実証的な勉強をしている人が、統計学会を相手にしないで、みんなそっちの方で研究の発展をするし、そこを中心に活動をするようになっていきますね。

こういっ ちゃ悪いけれども、統計学会に残っている経済学者というのは、これもオフレコだけれども、そういうことになりますしね。ですから、統計学会の経営もむずかしいですね。

竹内 ちょうどこの7月に、先生が関西大学で50周年記念の講演をなさしまして、あのときに最後にお触れになったと思いますけど、いまお話しになられましたことは、日本統計学会がより一層発展するための指針でしょうか。

森田 どんなこといいましたかね。

竹内 いまちょうどいわれたような共通の場といいましようか、つまり学会の経営ということ考えた場合に、いろいろの専門の分野があっても、共通の場といいましようか、何かそういうセクションを設けないと、やはりばらばらになってしまうという-----。

森田 そうですか。そのとおりでしたな。

結局、アメリカの学会でもイギリスの学会でも、それぞれ部会的な組織を持っていますわね。アメリカなんかは、それぞれ部会別の出版物も出していますわね。そしてとにかく大きくなりましたから、その学会に出てくる

レポートを全部1冊にまとめるというのは大変なことで、部会別のレポートをつくるという形になっていますね。そういうふうにしてそれぞれお互いに意思の通じ合う、話が通じ合うようなグループで勉強する場にしないと、これは聖書のたとえになりますけれども、バベルの塔みたいなものになってしまいますと、それで崩れてしまうわな。

やっぱり日本の統計学会も1000人というメンバーを抱えるようになったんだから、少しはそういうふうな工夫をして、これは解体するんじゃないに、むしろその方がしっかりと固まっていくような気がするんですけどね。  
竹内 アメリカの場合ですと、各セクションごとにプロシーディングスがちゃんと印刷されていて、ビジネス・アンド・エコノミック・セクション、そういうのが出ておりますし、それからソーシャルなセクションもありますし。

森田 幾つかのセクションで、アメリカはインスティテュートがたくさん分かれていますわね。それはお医者さんもいるんですしね。日本の学会でも、そういうふうに部会に分けてレポートしているんですけども、それが何というか、学会ごとのテンポラリーなものですからね。それをもう少しパーマネントな形にして工夫してみたらと思うんですけどもね。

竹内 先生のいまお話しになられたことに関連しますと、私どもの場合、たとえば後継者養成でしょうか、大学院の学生なんか養成する場合にも、将来を見通して、いろんなことを考えなければならぬと思うのですが、本当に細分化されてきている面があります。たとえば時系列

なら時系列を中心にしている方とか、いろんな方が出てくると思うんですけど、これからのそういう研究者の養成ということも、統計学の場合にいろいろ問題があると思うんです。

森田 たとえば大学院の学生にテーマを選ばせる場合でも、やっぱり昔と違いまして、非常に問題が特殊化していますからね。その問題を2年、3年という間にまとめるのに手いっぱいですから、どうしても知識が専門化され、特殊化される。そういうことになりますから、その方はその方ですとやっていかなきゃならぬと思いますけれども、やはり全体のバックグラウンドというものが必要だと思いますので、それも忘れちゃいかぬと思いますね。学会としては、そういうバックグラウンドを大きく束ねていくという使命が1つあると思いますね。

ですから、大きく束ねる仕事とそれから個々の問題、個々というと少し小さくなり過ぎてますけれども、全体の中である部分的な行動ができるような、部分的な活動で学問の進歩を図っていくことができるようなそういう組織も学会の中に持つことが必要じゃないですかね。

ですから、全体のバックグラウンドなしに個々の問題をやっても悪いし、個々の問題はうちではやらないんだということではみんな逃げてしまおうし、そのところかむずかしいところだと思いますけれどもね。そんなこと考えていますと、日暮れて道遠しやから。

竹内 先生には、いろいろお聞きしたいことがあります  
この本にもいろいろ細かいことが出ておりますけれども

特に戦後の統計行政といいたししょうか、これを再建、確立される際に、先生が一番ご苦心なされた点といいたしすか、たくさんあると思いたしすけど、先生このご本をお書きになるとき、なるべく客観的といいたしことで、「私」といいたし立場はなるべく後ろにおやりになつてお書きになつていいたしといいたしご配慮がございたしすが-----。

森田 それはそうですけれども、正直にいいまして、若いときのことにはわりによく覚えていいたしるんですよ。私がここへ来まして、ちょうど10年間局長しておつたんですけれども、非常に短かつたですね。夢のように過ぎてしまつたといいたししてもいいかと思いたしるんです。

ほとんどその間精いっぱい仕事しておつたんだと思いたしすけど、何にも頭に残つてないといいたしって言い過ぎじゃないような気がするんです。夢のように過ぎてしまつたといいたしことですね。

それは、いろいろ苦勞したこともあつたかもしれません。初めのうち、とにかく学校の先生が役人になつたんですから、本当に役人のイロハもわからぬ。特に私のような人間は、ずいぶん足りなかつたんだと思いたしす。それでこれはそこに書いてあつたかもしれぬし、書いてないかもしれぬが、非常に足りないといいたしことで、大内先生から呼ばれて、活を入れられたこともあつたし、あいつ足りないから、もう少しだれかわき役つけておけといいたしんで、正木君を引張つてきて、彼、それまで統計基準局といいたしかな、そこで美濃部氏の下におつたんですよ。それを私のところへ私のサブで——そのころは非常に役所といいたしのは簡単で、部や課の組織を変えようと思つたら簡単にできたとしね。

竹内 局長権限でできたわけでしょうか。

森田 局長権限といいますか、何もやかましいこといわれなかったですね。戦後のどさくさですから、人の配置なんかもあんまりやかましくない。定員とかなんとかあったことはあったですけど、簡単に変えられたですよ。それで、統計局は局長だけだったんですけども、そこに次長といったかな。

守岡 次長です。でもあれは正式の職名じゃなくて、通称ですね。

森田 通称ですか。そうですね。どちらにしても、通称でも何でも次長というんで、正木君を私の監視役に連れてきたんです。

ところが、統計行政の拡張で、各省の統計部がみんな局に昇格しまして、それで正木君は商工省の統計局長になって、いまの女子大の先の方に商工省の統計局が来まして、そこへ正木君移っていったんです。それでも私は少し教育されたんだろうね。それでいいことになったらしいんだけどね。

統計行政といたって、統計全般の行政は基準局があって美濃部氏がやっているんですからあれですけども、私は一生懸命に地方の人のごきげん取って働いてもらって、そういう考え方でおりましたから、できるだけ地方にサービスして、地方の職員の方とできるだけよくお話をして、そういうような気持ちではおっただけです。ですから、私は地方の人たちにあまりたたき上げられることはなかったですね。いまでも、そのころの古い人とよくおつき合いしております。だんだん減ってしまいましたが。

竹内 私、いま学部長などというポストにおりまして、研究は非常にできない。先生は局長の10年間、いろいろ研究の成果を発表されておりますが-----。

森田 ほとんど勉強する時間なかったです。私の45から55ですから、一番大事なときや。それを役人でおったもんですから、何にも学問的な仕事、といったって、もともと頭がバカなんだから大したことできない。

竹内 アウトプットの業績リスト見ますと、普通の自分の専門で研究されている方よりもたくさんアウトプットをお出しになっている。

森田 決してそうじゃありませんよ。特に年とってから、ますます何にもできなくなりまして、そういう点では、かえってよかったのかもしれぬな。学校の先生ばかりやっておったって大したことにならなかったでしょう。そういう言いわけができるだけ、私は幸せだったかもしれませんよ。そういう意味で、後悔はしておりません。

竹内 先生は一番役人らしくない役人といいたまうでしょうか、学者局長ですから。

森田 そんなことはないです。とにかく学者といえる学者じゃないですけども、勉強をしておいた人間が、たまにたま時局の関係でこういうふうになりまして、これはある意味で欧米並みに近い形だったんですけれどもね。欧米といったって全部がそうじゃないでしょうけれども、大体ヨーロッパ流の統計の仕事というのは、統計のエキスパートが責任持ってやっているんですね。日本は、それに近い方もいらしたと思いますけれども、普通のお役人の方が責任持ってやっておられて、それを技術屋さんが技官の形でお助けするという形だったんですからね。

竹内 そういふ点では、先生が局長時代に、守岡さんなり永山さん、そういう専門家といひましようか、エキスパートとしてのそういうお役人を育てられた功績は大いんじゃないでしようか。

森田 それは多少、私が責任者だったですから、下の方にも同じような気風で仕事をしていただくような形に、ある程度なつたんじゃないかと思ひます。役人的な考え方じゃなしに、統計のエキスパートとしていろいろ勉強してもらう、仕事もしてもらう、幾らかそういう傾向だったのかもしれません。それはその人その人によりますわね。

だけど、役所というところは、人をたくさん使つて仕事をしてもらうんですから、それだけではいけませんし、人使いも上手にしてやつていかぬとね。私は幸か不幸か一番トップで、人使いのところはいい総務課長さんが手伝つてくださつて、そういう方面はもつぱらお願いしておつたですから、そういう点では非常に幸せだつたと思ひます。

竹内 ここにも出てまいりますが、山中さんだつたでしようか、総務課長兼任で-----。

森田 これは、そのときにまたまこの庶務課長さんが病氣になられまして引込まれたので、それを埋める仕事を統計委員会の事務局の課長をしておりました山中氏に、わりとウマが合つたもんですから頼んで、どちらが本家かわからぬような形でそこへ寝泊りしておつたな。短期間だつたですけどもね。

竹内 先生は総理府統計局の局長といたしまして、たと

えば局とそれから総理府の長官の間に入って、たとえば概算要求とか、いろいろな問題含めまして、そういうときは、女房役の次長的な方がいろいろやられたわけでしょうか。先生はあまりそういう場には……。

森田 占領中は、特に統計の仕事につきましては、占領軍の司令部の方と直結して、むしろ司令部の意向で動いておりましたから、日本の政府の内閣の上の方は、むしろノータッチなんです。ですから私のときには、特に初め占領中は本部へ行って、それで官房長官や総務長官にいろいろ報告するというふうなことはほとんどなからなです。

いまは、そんなこととてもダメですよ。1から10まで全部あれしなければとてもできませんけれども、そのころはそれが司令部の方、アメリカさんの方を向いて仕事しておったわけですよ。いまの局長さんが長官のところへ行くのと同じように、われわれはアメリカの司令部へ行って一々報告しておったわけですよ。

そういう形だったですから、私みたいな素人の役人でも、そういうふうな形の交渉は役所の上下関係とまた違う色合いがあるでしょうから、できたんですよ。

それが、占領が終わりました後5年ばかりやっておったですけれども、初めのうちはその空気が抜けませんで、大体それと同じような仕事のやり方でよかったわけですが、けれども、だんだんとそうじゃいかぬようになりまして、そうなりますとばくじゃダメだ、素人役人じゃ……。そういうときには、総務課長さんみんなしっかりしておったからね。

竹内 やはり伝統的な日本の官僚制度といいましょうか、

そういう枠組みが非常にがっちりしていて、先生は対占領軍との関係で、いまでいいますと、長官的な役割りをされておったのが、今度は総理府なら総理府の長官なり何なりを意識しないと、新しい仕事をされる場合にはやりにくかった。

森田 それは極端な言い方になるかもしれませんが、それに近いあれですわね。しかし、長官によりましては、やっぱりあんまりいい感じしなかったのかもしれませんが。ときどきそんな皮肉いわれましたけどね。しかし、あまり接触する必要がなかったですし、機会もなかったですね。その点はわりに楽だったですよ。

竹内 守岡さん、その当時の部下といたしまして、森田局長に対するご感想はいかがでしょうか。

守岡 一番下の方だから……。(笑)

森田 そんなことないですよ。

竹内 私が学生時代こちらにお伺いしたころいらしたのは、守岡さんと永山さんぐらいですね。エキスパートの方々でしたから、いまでも非常にそういった意味で親近感を持って……。

森田 私はこの人に非常に助けてもらったんだ。それは、たとえばずいぶん原稿つくってもらいましたな。

守岡 あまりないです。

森田 あまりないが、少しあったよな。たとえば、どこか地方へ行って話をするときの話の種をつくってもらったり、何か一遍かなり詳しいあれをしてもらったことがありますわ。何だったか、いまちよっと思い出せませんがね。いろいろ助けてもらったですよ。そういう点では、守岡先生非常に綿密に仕事してくださいますからね。私

自身が自分でやるよりか、ずっといいデータをつくらせてくださるから、大変助かりましたよ。

竹内 先生は本当にいい部下をお持ちになって、それから部下の方々もいい局長をお持ちになって……。

森田 いや、いい局長の方はどうか知らぬけど、いい部下はいい部下ですね。(笑)

竹内 本当に人間関係がきちんとしていませんと、なかなかこういう大きな組織体を動かすのは大変ですから。

森田 まあそうですね。この統計局も、ある意味では戦争を境にして、近代化されたわな。やはり戦争前の統計局というのは、もちろん統計の専門家としてここで仕事をしていた方、たくさんあるんですけども、どちらかというと、いい意味において職人ですわね。

それが戦後は近代的な勉強をして、学問として統計の勉強をされて、そういう方に手伝っていただくことになりましたからね。そういう意味で近代化されたですね。それ以前は職人的なあれでしたな。ですから、これはものすごいもんですよ。たとえば、いまこれ平気なんだ。本当は、ぼくは非常に不満なんですけどもね。たとえば統計年鑑つくるでしょう。あれで大きなミスプリントがときどきあるんです。昔はそれがあつたら首もんだったんですよ。ですから、非常に厳密に校正をした。その努力は非常なもんだったと思いますね。いま、そういうことわりにルーズになっている。それは考え方の違いもありますけれども、組織そのものが昔と違って来たこともあるでしょうね。

竹内 昔の方は自分に与えられた仕事というのは天職と考えて、その自分に与えられた中では本当に最善を尽く

して、絶対に間違いないようにという意識が、いまと大分違ってありましたね。

森田 そういう点で非常に感心して教わりましたのは金子さんね。あの人が年鑑の編集をしておられた。非常に綿密なもんでしてね。一々物差しで組み方をはかって、校正も非常にやかましいですね。そういう仕事の仕方は、やっぱりある程度ここにも伝統的にあったんですよ。おそらく戦後もそういう伝統はあって、そういう先輩に仕込まれた人がずっとやってきておられましたよ。しかし、だんだんそれが数少なくなってきたわな。

竹内 だんだんサラリーマン化してきたんじゃないでしょうか。というか、昔でいいますと、いい悪いは別にしまして、たとえば5時が終業になるとした場合に、6時でも7時でも自分の立てた目標はちゃんとやってから帰る。それがいまは5時になったらさっと、あるいは5時前から支度をして帰っちゃうとか、そういうあれがあるんじゃないでしょうか。世の中、時世が違っているからあれですけど。

森田 そういうことは別に、どこでもそういう傾向が少しはあるんじゃないでしょうかね。ただ、時間的に非常にパンクチュアルであるというのは、欧米、特にアメリカなんかそうですね。非常にはっきりしていますね。そのかわりに、時間中は非常に密度高く仕事していますね。そういう点はやっぱり日本と違うところ。

竹内 大分時間たちましたから、締めくくりとしまして、最後に私ども後進の統計学研究者に何か-----。

森田 それよりか、これは学会の記録になるんだそうで

すから、そういうことであれば、さっきいった学会の将来のあり方というものをやっぱり皆さんで検討していただいて、そして学会が大きく発展していく方向を見つけていただくということが一番大事だと思いますね。新しい時代ですから、新しい皮袋をつくらぬと新しいお酒は入れられませんしね。

そういう点で、統計学会の将来発展というふうなこと、これはやっぱり学会として一番大事なことですから、そういう方向を見きわめて善処していただくということ、せっかくここまで伸びてきて、ますますむずかしくなるでしょうけれども、それに対処して、どういうふうにかじを取っていったらいいかということですね。

竹内 どうもありがとうございました。午前中に先生講義なさってから、一たんお家へお帰りになって、またお戻りになって、お疲れのところを本当にありがとうございました。

いろいろ予定はしてきたんですけど……。

森田 予定どんなことがありますか。

竹内 お聞きしたいと思いましたが、この前の8月と今回で……。

森田 あるいは私、簡単に書くことができるようなことであれば書いてもよろしいですし、たとえば個条書きにさせていただいて、それについて何かメモでも提供しろということであれば、いつでもいたしますから、これでおしまいじゃなしにどうぞ……。

どうも長いこと本当にありがとうございました。

竹内 こちらこそ本当に長時間ありがとうございました。